
ぬらりひよんの孫の世界に転生？えっ？ということ？

武士道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫の世界に転生？えっ？どういうこと？

【Nコード】

N4158V

【作者名】

武士道

【あらすじ】

武「初投稿です。みなさんよろしくね。」

氷渡 宗の異世界探検（前書き）

初投稿です。誤字や脱字が多いかもしれませんが・・・どうぞよろしくお願ひします。

どうか温かい目で見てください。

氷渡 宗の異世界探検

俺の名前は、氷渡 宗だ。ただの高校2年生だ。さて、自己紹介したところでなんだが。

「……ここは何処だ？」

俺はいつも通りに学校に行つて、それから家に帰つて寝ていたはずなんだが……

きずいたらいつの間にか、とてつもなく暗い部屋にいる。……どういうことだ？

『気付いたか？』

「！！！！」

「誰だてめえ？」

『何、気にするな。・我はただの死神だ。・』

「死神だと？てつことは俺は死んだのか？」

『そうだ。・たつた今お前は死んだのだ。・』

「だつたら俺を、今すぐにでも地獄にでも天国にでも連れてけばいいだろう？」

『そうだな。・しかし我はお前に興味がわいた。・どうだ？異世界に行つてみんか？』

「異世界だと？どういうことだ？」

『ふむ。・お前は生前世界を支配したいと考えていたな？我はそれを見てお前に興味がわいたのだ』

「へえ。・俺の考えていたことで興味がわいたと。・だが。・俺をその異世界とやらにいつてお前に何の得がある？」

『なあに。・その方が面白いからな。・』

「ただの娯楽かよ。・とんでもねえ死神だな。・いいだろう。・そ

の異世界とやらにいつてやる。早くしてくれ」

『一応お前に能力をくれてやる・・・この箱をあけてみよ』

俺は、その箱を開けると妙な紙があり、見てみるとそこには、身体能力上昇、五感の上昇、自己治癒能力上と書かれていた。」

「中々いいんじゃない？」

『ふむ・・・お前は運はそこそこのようだな・・・ついでだ。お前が好きだった「るろうに剣心」の斉藤 一の剣術をくれてやる・・・せいぜい次の生を楽しむことだな。』

「ああ、ありがとうよ。じゃあいつて・・・最後に頼みたいことがあるんだがいいか？」

『言ってみる・・・』

「ああ・・・友達の俺に関する記憶を完全に消してくれ・・・頼む・・・」
『ほう・・・お前がそんなことを言うとは思っていなかった。いいだろう・・・特別に消しておいてやろう。』

「ありがとうよ死神・・・それじゃあ行ってくる。また死んだら会おうぜ死神」

『ああ・・・また死んだらな・・・迎えにいくよ。』

そういつて俺はまた意識を失った・・・

氷渡 宗の異世界探検（後書き）

初投稿です。ちなみに主人公の名前はひわたり しゅうです。
どうぞよろしくお願いします。

主人公説明　くその他もろもろ（前書き）

主人公説明です。

主人公説明　くその他もろもろ

氷渡　宗（氷斬）

元はただの高校生だったが、死神に殺され異世界に行く。

性格は正義感が強く、なにかに縛られるのがいやな自由な性格

能力は、妖怪の力は氷の力のようだ・・炎猿曰くとんでもない妖気らしい・・本気を出すとただの人間や雑魚妖怪はすぐ凍ってしまうらしい。

武器及び元々の能力

武器：不月（刀）消えない月と言う意味でつけた。

能力：身体能力上昇

五感上昇

自己治癒能力上昇

炎猿のことは炎と呼ぶ

仲間にはとても優しく、仲間になりたいと言うものは何でも仲間にする。お人好し・・・身内が馬鹿にされたり、敵が攻めてくると鬼のように闘う・・・以上！説明でした！

主人公説明　くその他もろもろ（後書き）

はあゝ疲れたゝどうも武士道です。次は戦闘シーンがくるかも知れません。

もしかしたら京妖怪と一戦やるかも・・・
お楽しみに！

感想くれたらうれしいです。

気付くと吹雪の中にいました!?(前書き)

どうも武士道です。

感想書きたい人は、どんどん書いてください。

ヨロシクネ!

気付くと吹雪の中にいました!?

気付くと俺は、吹雪の中にいた!?

「うお!寒っ・・・くない? いったいどうなってるんだ? まあ・・・い
いか・・・後で考えよう。」

そんなことで、頭を抱える俺一人・・・寂しくなってきた・・・

「??何だこの服装? 一体いつの間に着替えたんだ? それにこの刀
は一体・・・?」

ふと袖の中に手を突っ込むと・・・紙が入っていた、そこには『その
着物と、刀はサービスだありがたく受け取れ。ちなみにその刀は切
れ味が落ちない妖刀だ。名前は自分で決める。達者でな・・・』と書
かれていた。

「あいつ・・・結構いいやつなんじゃねえの?」

そんなことをつぶやいていると、吹雪がいつそう強くなってきたの
で俺はその場を離れた。歩くこと1時間・・・目の前に淡い光が見
えたので近ずいてみた、すると光が消え代わりに

「死ね! 人間!」と言いながら火を出して向かってくる化け物を俺
は、斉藤 一の牙突で黙らせた・・・

「お前は一体なんだ? そして、ココはどこだ?」

「俺は、炎猿・・・妖怪だ・・・ここは、奥州の出羽と言う所だ・・・」
奥州だと・・・俺は、タイムスリップしたのか? いや、そんなことよ

りもこいつ妖怪だと? そんなことを考えていると・・・

「あのくお頭・・・大丈夫ですかい?」

「大丈夫だ。おい・・・お頭って何だ?」

「あんたは、俺をその刀一本で倒した・・・あんたのその強さに惚
れたんだ! 頼む! 俺を、あんたの部下にしてくれ!」

「いいのか? 俺はただの人間だぞ・・・いつかは寿命で死んじゃう・・・
そんなやつについていてどうする?」そういうと・・・

「へ? 人間? なに言ってるんですか? お頭、とんでもない妖気だし取

るじゃないですか？あつしをだまそうたってそうは行きませんよ！」

「……待て、こいつ今なんていった？俺に妖気があるだと？」

「もしかして……お頭……気付いてなかったんですかい？」

「………うるさい」

そんな風にいじける俺……まあとりあえず力の使い方を覚えなきゃな……

そして、俺は炎とともに修行を開始した。

その後の、2年間はとんでもなかった。いきなり山の妖怪全部が、俺を危険視して襲い掛かってきた……。まあ全部ぼこぼこにしたんだけどね……（笑）その後、そいつらが勝手に俺の部下となった。そして、総勢50名の氷斬組の完成となった。

「……氷斬？ああ、これはある日一人の部下が……」

「そういえば、お頭の名前ってなんていうんです？」と聞いてきたので……

「お前から勝手につける……」と返したら……氷斬となった。

そして、俺は組を一時的に炎に任せて旅に出た……。一応炎には、勢力拡大をしておくようにと言っておいた。

「しかし、あいつら結構強い奴らなんだったんだな……」

なんで、こんなことをいうのかと言うと……。この前別の集団が攻めてきて、俺が行こうとしたところ炎が「お頭は見ててください。あつしらが何とかしますんで……」と言ってきたので見ていたら……

「……圧倒的じゃん……ものの5分で決着がつくとは思わなかったよ。そんな所を見て俺は、今山を降りている……。そして、俺は小さな村についた……」

気付くと吹雪の中にいました！？（後書き）

ちなみに炎猿えんじょうといいます。火の妖怪です。

次回はいろいろ戦闘シーンが入るかもしれません。
次回をお楽しみに！

氷斬道中〜京までの道編〜（前書き）

こんにちわ！武士道です。

下手な文章ですがよろしくお願いします。

要望・意見がありましたら、コメントお願いします。

氷斬道中〜京までの道編〜

俺は今、東北を出て炎が話していた越後のある村に来てい
る。

ふ〜着いた〜ここが、炎が行った村か、炎がいうには結構平和な
村だっけ聞いたんだが・・・おいおい、何なんだよ・・・こりゃあ！見
てみると、村はひどく荒れていた・・・人が焦げる匂いと、ひどい血
の匂いを感じた。おそらく、山賊にでも襲われたのだろう・・・
可哀想に。

『うつ・・・』と子供の声が聞こえてきたので、そこに走ってみる
と男の子と女の子が怪我をしていた。

「！！大丈夫か！？』そうして、俺が駆け寄ると・・・

「！！くそっ！まだいたのか！やい！お前！姉ちゃんに手を出した
ら殺すからな！」

「やめな！金護！お前があの人には勝てるわけがないだろう！」

「でも銀紗姉ちゃん！あいつ・・・とう「ああ〜俺、山賊なんかじゃ
ないぞ・・・」えっ！？』

そういうと、兄弟はとても驚いているようだった・・・俺山賊に見え
るのか・・・結構ショック・・・

落ち込んでいると姉の方が「あの〜大丈夫ですか？」と聞いてきた
ので「ああ・・・問題ないよ・・・お嬢さん。」と返した。すると・・・

「やい！何でお前、こんなところにきてんだよ！今ココは危険なん
だぞ！妖怪が出るんだ！この村もその妖怪に・・・うわーん！」

「妖怪だと・・・おい坊主！その話詳しく教えてくれねえか！？」

しかし、金護は泣いていて聞いてくれそうにないそんな時・・・

「私がお教えしましょう・・・ある日、この村に妖怪の集団が襲い掛
かってきたのです。たまたま、村に

京の都からきた花開院の陰陽師がいて、闘ってくれてのですが・
死んでしまいました。そして、今のこの有様です。生き残りも私た
ち兄弟のみ・。たった今自殺しようかなど考ええておりました。」
「そうか・。辛かったな・。よし！その妖怪、俺が倒してやるよ
！」

「ええ！本当ですか！でも、相手は複数の妖何ですよ！人間のあ
なたが勝てるわけじゃないですか！？」

「大丈夫だ・。」そして、俺は銀紗の頭をなでて・。

「俺も妖怪だから・。」

『えっ・。』と言って銀紗達を見ると既に、男の姿はなかった・。
・。

一方村はずれの森の中では・。

「なんだ・。また新しい人間がきたのか・。」そんなことを言
っている、大将のような妖怪が一匹そして・。

「食っちゃまおうぜ！兄者！俺、腹減ってんだ！」

「お前は、さつきも食っただろう？村の人間をほとんど食っておい
て・。すごい食欲だな・。」

「確かに食ったけどよくまた腹が減ってきたんだ・。我慢できねえ
よ！！」

まったく・。仕方のない弟だと・。兄は思っていると・。

「ほう・。おめえらがあの村を襲った妖怪どもかい？兄のほうは
いいとして、弟の方はとんだ食人鬼だな・。」と氷のような冷た
い声が聞こえた・。

俺は、妖怪の兄弟にそう言うと言った。すると・。弟の方が
「ああ？なんだおめえ？ただの人間が・。俺たちに勝てると思う
なよ！」そういうと、弟の方が人間の姿をやめて妖怪の姿になった。

ふむ・・鬼か・・結構強そうだ・・

「どうだ？怖いだろう？恐ろしいだろう？黙って俺に食われなあ！」
そうして、あいつは斧を振り上げてくる。俺は、それを片手で受け止め・・凍らせた・・

「！！！！馬鹿な！貴様、人間ではなかったのか！それに、ただの雑魚妖怪が俺の一撃を止められるわけがない！貴様！何者だ！？」

「俺の名前は、氷斬！その村の餓鬼に助けてくれって頼まれてな・・お前らを倒しにきた。」

「氷斬だと！！たしか・・今、奥州で一番勢力を伸ばしている氷斬組の氷斬か！？」氷斬と言う名前を聞いて驚く兄・・しかし、弟は「何をびびってんだ兄者！こんな奴、最後の狂鬼と恐れられた俺たちのてきじゃねえ！」

「待て！？玄鬼！俺たちのかなう相手ではない！」兄は喋るが弟は聞いていない・・

「何を臆することがある！邪鬼兄！こんな奴一ひねりだ！」

「ふゝ仕方がないか・・・」俺は、刀を構え・・・

「牙突！」

「な！ぐは！」玄鬼という鬼は牙突をもろに食らって気絶した。

「ふん・・畏を使うまでもないか・・おい！その邪鬼とやら！」

「・・・何だ？」

「お前、俺の仲間になんねえか？もちろん、おめえの弟も、ここら辺の妖怪もだが・・・どうだい？」

「あんたの仲間に・・・」邪鬼は少し考え・・・

「分かりました・・・我ら最後の邪鬼とその配下、総勢30名世話になります！お頭！」

「兄者が従うなんて・・よし分かった！俺もあんたについていく！なあいいだろ！？」

「ああ・・心強いよ・・」そうして、俺は村に戻った。

「あつ！あん時の兄ちゃんだ！」「大丈夫でしたか？」と言って俺

に寄ってきた・

「ああ・大丈夫だったよ。それより・・本性を現したらどうだ？」そういつて、俺は弟の方を刀で切る！すると、

「・・・いつからキズイテタ？」

「最初からだ・・お前から妖気を感じたのでな・・それでも、最初は疑ったよ・・だが、疑いは確信に変わった！玄鬼が食ったのは人でも、死体だったそうだ！・・この村のな！」

「・・力カ力、ナルホド・・出羽の氷鬼がどんな物か見てみたがつたが・・いやいや、噂は真であったか・・オモシロイ！この村人のように「黙れ・・・」ガッ！」

狂鬼達を見ると、その妖怪は既に凍っていた・・

「ナンダ！？この尋常じゃない妖気は！この化け物メ！」

「これでも、元人間なのだがな・・しかし、お前にはそれを言われたくないな・・死ね・・」

そうして、名も知らぬ妖怪は凍りつき最後にバキッ！と砕け散った・

「???いつ・・一体どういうことなの・・」

「銀紗か・・すまない・・お前の弟は既に死んでいる・・」

「!!!どういふことなのよ！」

「あの妖怪の名は・・腐葉と言う妖怪だ・・人を食うのではなくただ人を殺すの生きがいとしている妖怪だ。そして、あいつは人に成り代わることができる・・」

「人に成り代わる・・・?？」

「ああ・・あいつは、人を殺しそいつの死体に宿ることができるんだ・・あいつは、この村の人間を殺してお前の弟に成り代わり、お前を殺そうとしたんだ・・そこに、俺が来たってワケだ。」

「そんな・・私はこれからどうすればいいのよ!？」

「知らん。自分で考える・・だが、お前が来たいなら一緒に来いばいい。」

「いいの？わたし、人間だよ・・ついていていいの？」

「いいんじゃないか？俺も元人間だし、俺はかまわないよ。おめえらはどうだ。」

「「お頭が言うならわれらも賛成です。」」

「ありがとうよ。玄鬼はどうだ？」

「お頭く勘違いしないでくださいよ？俺は、生きた人間なんて食いやしませんぜ？第一、生きた人間なんて気持ち悪くてくうきにならねえ……」

「そうだったのか？悪いな……で？どうする？ついてくるか？俺たち……」

「……うん！着いていくよ！よろしく！お頭！」

「やれやれ……また家族が増えた……まあいいか。」

（一週間後）

「お頭行つちまうんですかい？」と玄鬼

「この土地と村はおまかせください！氷斬様！」と邪鬼

「ああ、すこし京を見に行ってくる……」

「京ですと！！」「京だつて！」と驚く二人……そんな驚くなよ・

「氷さん……行つちゃうの？」

「ああ……銀紗。お前は、この村にいるんだ危ないからね……帰ってきたら、あいつらも連れて俺の故郷に行こうな……」そういつて、俺は銀紗の頭を撫でる。

「お前ら！俺が帰ってくるまで此処を頼む！」

「「お任せください！！」「」」

そして、俺が行こうとした所……

「氷斬様！私を連れて行ってください！」と邪鬼

「邪鬼よ……お前はあいつらのまとめ役だ……そんなお前がいなくなったらどうする？」

「……分かりました。では、玄を連れて行ってやってください。」

「??何でそんなことを言うのだ?」

「あいつに京を見せてやりたいのです!どうかお願いします!」

「・・・分かった。明日、京の都に出立する!玄にもそう伝えとけ!」

「!!ありがとうございます!早速伝えてまいります。」そういつて邪鬼はいつてしまった。

～翌日～

「お頭!早く行きましようぜ!」

「分かった分かったから、引つ張るな!」そういつて、注意する俺

「「行つてらっしゃい!」と手を振つて見送る仲間たち

「氷斬様・馬鹿な弟をよろしくお願いします。」

「ああ。任せておけ!」

「お頭!早く早く!」

「ああ。今行く!」

そうして、玄鬼とともに京へ向かうのであった・・・

氷斬道中〜京までの道編〜（後書き）

疲れました。

次は京妖怪と戦う予定です。

ちなみに、時代は戦国時代より500年くらいまえです。

もしかしたら、羽衣狐出るかもしれません。

妖怪の名前、技の名前や、能力などの要望や意見がありましたら、感想にかいてください。次回をお楽しみに！！

京に到着！あれ？何この妖気？（前書き）

こんにちは！！武士道です！

頑張って更新するんでよろしくお願いします。

京に到着！あれ？何この妖気？

俺は、玄と共に京に入った。しかし、なんだ？この妖気は？

「なあ・・・玄鬼」

「なんです？お頭？」

「何なんだ？この妖気は？それに、人間もあるいていないようだ・

・一体京に何が・・・」

「さあ・・・俺には分かりませんねえ・・・でも、この妖気は危険で
すぜ・・・お頭気をつけて行きましょう。」

「そうだな。よし！玄！ここは、二手に別れて情報収集しよう。」

「わかりやした。お頭、牛の刻にこの場所で・・・」そういつて、
玄鬼は消えた。さあて、俺も始めますか！

・・・今さらきずいたんだが、ここつてぬらりひよんの孫の世界
じゃね？だって、あれつて・・・

「おおう？お前強そうだなあ？俺と勝負しろやあああああ！」

「ななななな・・・何で土蜘蛛がああああ！？」俺は、土蜘蛛の放
つた張り手を間一髪でかわした。

「いいねえ・・・そうこなくちゃあ・・・面白くねえ。」

「なんで、こんな所にいる？土蜘蛛？」

「ほお？お前さん、俺を知ってんのかい？」

「ああ・・・一応な・・・」

「なら、話は早いな・・・おらあ！！」また、土蜘蛛の張り手がや
ってくる。それを、俺は氷の壁を作つて防いだ。

「なんだあ？お前氷の妖怪か？面白れえ！！」そして、土蜘蛛は畏
を開放する。

「なんて畏だ・・・俺も、本気で行くか！！」俺も畏れを開放する。
「ふは！いいねえ！！それが、お前の畏れかい！？ちかずいただけ

で、凍り付いちまいそうだ!!」

「そうかい!! ありがとうよ!!」そういつて、俺は土蜘蛛を一気に凍らせた。

「ふゝどうだ!?」まだまだあ! こんなんじゃたりねえよ!!」なっ!! ぐう!」俺は、土蜘蛛の蹴りをまともに食らってふつとんだ。「がはっつくそっ! なんて威力だよ! 反則だろ!」そして、俺が愚痴つていると

「おらあ! よそ見してんじゃねえぞ!!」再び土蜘蛛のけりが飛んでくる!!

「あぶねえ!!」俺は、それをかわす。

「おいおい・・・よけてばっかじゃつまんねえだろ? 反撃してこいよ?」

「仕方がない・・・チャキ」俺は、刀を抜く・・・一気に方をつける!!

「いくぞ!!!! 氷天我戟!!」氷の竜が土蜘蛛を襲う!!

「なに!?! ぐおおおお!!」土蜘蛛が一気に凍りつく。

「くそが!! 何だつてんだ!! この氷は!! 壊せねえ!?!」

「あれを食らつてもまだ喋れるのか・・・だが、じきに話すこともできなくなる・・・その氷が解けるのは500年後くらいかな?」

「くそ・・・覚えてろよ!・・・500年後また勝負しようぜえ!!!!・・・がつ!!」

そうして、土蜘蛛は凍りついた。

「二度と御免だっつーの・・・はあゝ疲れ」ほう? そなた・・・土蜘蛛を倒したのか?」・・・誰だ?」

「ふふふ・・・わらわは、羽衣狐じゃ・・・どうじゃ? そなた、わらわの部下にならぬか?」

まさか・・・ここで羽衣狐と出くわすとは・・・もう、体力も限界に近いし・・・逃げるか!!

「うれしいお誘いだが・・・断らせてもらっよ!! はっ!!」俺は、吹雪を起こし逃げた。全速力で!!

「ふふ・・・あの面白い男じゃ・・・また会いたいものよ・・・」
そうして、羽衣狐も闇に消えた・・・

「ぜえ！ぜえ！まさか、あいつらと出くわすとは！！とんだ誤算だ！！・・・だが、しかしこの京の状況はあいつらが関係してるに違いない・・・」俺が独り言を言っている

「あつ！お頭」と玄鬼がきた・・・遅い！！

「おお！玄！どうだった？」

「はい！あちらこちら、妖怪だらけで苦労しましたが・・・どうやら、羽衣狐が何かやっているようですぜ！！」

「そうか・・・やはりな・・・よしっ！！玄！今すぐ、帰るぞ！！」

「ええ！！今さっき来たばかりじゃないですか！！もう少しましようよ！！？」

「駄目だ！まだ、京に入る時期ではなかった。もう少し、時がたつたら来るとしよう！」

「・・・分かりました。お頭がそういうなら・・・」そういつて、落ち込む玄・・・ちよつと、悪いことしたかな？

そうして、俺は越後の仲間を連れて出羽の本拠地に戻った。

「ただいま！！久しぶりだなあ！お前ら！！」

「「おっ！お頭あ！お帰りなさい！」と叫ぶ、俺の仲間達・・・あれ？お頭あ・・・後ろの奴らなんなんですか？」と炎・・・

「ああ・・・俺の旅先で仲間になった奴らだ・・・仲良くしてやれ・・・おい！お前らも挨拶しろ！」

そう言われて、越後の奴らは「「よろしくお願いしマース！！」」と挨拶した。

「へえ・・・お頭もやるじゃないですか！！新しい仲間を連れてくるなんて！！」

「まあな・・・それより、どうだ炎？組の調子は？」と俺が聞くと・・・
「お頭ああ！！いい所を聞いてくださいました！ついさっきまで、順調に勢力を伸ばしてたんですが・・・陸中（現岩手県）の河童党が邪魔してきまして・・・しかも、結構手ごわいんだそうです。陸奥、羽後の妖怪は全部手中に収めたのですが・・・」・・・驚いた！！以外に勢力のばしてんじゃん！！氷斬組！！

「いや・・・そこまでしていれば十分だ。その、陸中の河童党と陸前の妖怪共は俺がじきじきにいくとしよう！！おい！俺と共に出入りしたい奴はついてきな！！」すると、

「「「「「おおっ！！！！！！！！！！」」」」」と返してくれた。いいねえ・・・こういうの・・・

感動していると・・・銀紗が、「あたしは、ここで応援してるね！！」と言ってきた・・・

「ああ・・・行ってくる。おい！玄！俺らが帰ってくるまでこの子を頼む！！」

「ええ！！俺も一緒に「頼む・・・」分かりました・・・」玄が泣きながら銀紗と共に屋敷に入っていた。すまない・・・玄。

「お頭！！早く行きましよう！！」と炎

「氷斬様！！お早く！！」と邪

「分かったよ・・・よし！！てめえら、行くぞ！！向かうは、陸中！！」

「「「「「おおおお！！」」」」」

そうして、俺らは陸中へ向かった。

そのころ、陸中では・・・

「赤河童様あ！！大変です！！氷斬組がこちらに向かってきております。」

「そうか・・・しかし、また敵の幹部や、大将はいない。烏合の衆なのであるう？」

「いえ！！それが・・・様子を見てきたところ・・・仲間が全員凍りついておりました！！間もなく・・・こちらに来ると思います！！」

「何だと！！馬鹿な！！氷斬が帰ってきたとでも言うのか！！あいづは、京に行くのではなかったのか！？」と動揺が隠せない赤河童・

「はっ・・・それが、急に新たな仲間を引き連れかえってきたとの報告が・・・」

「くっ・・・こうなったら、迎え撃つしかないか・・・全員！！戦闘準備！！」

「くくくはっ！！！！！！」

こうして、赤河童は戦の準備をするのであった・・・

京に到着！あれ？何この妖気？（後書き）

次回は新しいオリキャラをだします！！

今のところ、幹部は炎と玄と邪と次回に出てくるオリキャラです。
オリキャラ募集中です！どんどん、書いてください！！

東北制庄！氷斬の出会い！？（前書き）

どうも〜武士道です。この前、気付いたら、いろんな人がこの小説を

評価していて驚きました。これからも宜しく！！

東北制圧！氷斬の出会い！？

「ふゝここが、陸中か・・・水が綺麗だな・・・」そんなことで、俺らは今、陸中に来ている。

先ほど、見張りの妖怪が来ていたが、俺に近ずいた瞬間凍ってしまった・・・

「お頭、もうちょっと妖気を抑えてくれませんかねえゝあつしはともかく、ほかの奴らが凍っちまいそうだ・・・」と言われたので「ん？」と後ろを見ると・・・みんなが震えていた・・・そんなに寒いかな？

「・・・俺たちをお頭と一緒にしないでくださいよ！！！！」「・・・」と怒られたので一人で落ち込みながら、妖気を抑える・・・

「氷斬様・・・あれが、河童党の本拠地。河童池です。」と邪鬼、俺が「ん？どれどれ？」と見るととても綺麗な池が見えてきた・・・だが、池の前でたっている奴らがいる・・・なんだ？あいつら？？

「あつ！！お頭あ！！あれが、河童党の頭の赤河童でさあ！！」と炎

「へえ・・・あれがねえ・・・全員！！一応戦闘準備！！」と掛け声をかける俺・・・すると、

「貴様が、氷斬組の大將氷斬か！？この土地は、渡さんぞ！！全員！かかれえい！！」

すると、赤河童の後ろから物凄い量の河童どもがやってきた。

「おいおい！！やめとけ！俺に今は近ずくな！！」俺は、そういうと・・・

「ひゃつはゝそんなことを言って動揺させようなんて、見え見えだぜ！！しねえ！！」と言って突っ込んでくる河童たち・・・すると「ぎゃ！！寒い・・・凍る！！助けてくれ！！・・・」がっ！！「そういつて、河童たちは凍ってしまった。

「あゝあゝだから言ったのに・・・赤河童とやら！！もうこれ以上の戦闘は無意味だ！！俺らの仲間になんねえかい？」

「あなたの仲間に・・・分かりました。しかし、提案があります。わたしと、一騎打ちしてもらいたい!!」

「いいだろう・・・明日の日の出と共に決闘を始める。いいな?」

「わかりました・・・それでは!!」そういつて、河童どもは池の中に入っていた。

その晩・・・

「お頭あ!!本気ですかい!?赤河童は噂ではかなり強いそうですよ!」と炎

「大丈夫だ・・・炎、お前は俺が負けと思うのかい??」

「うっ!そんなことはありませんが・・・」そんなことを言っていると邪が

「だったら、心配をするな・・・それが、我ら幹部の務めでもある。それにしても、赤河童も考えたものですな・・・あのやり方が仲間を減らさずにすむ・・・まあ、それにきずいた氷斬様もすごいですが。」と邪

「ははは・・・言つとくが俺は誰も殺してなどいないよ・・・」と言つと

「何だつて!?!」「何ですと!?!」と二人・・・殺すわけないじゃん。あいつらを・・・

「今は、ただ凍っているだけだ・・・明日の朝にはもう解けているだろう・・・」そういうと、

「「流石お頭!!」」と知らない奴らが話しかけてきた。誰だ?こいつら?

「あつ!申し送れました・・・私、水霊みずちの蒼そうです。羽後出身です!そして、こちらが「カマイタチのキタクだ・・・陸奥出身だ・・・よろしく。」私たち、つい最近幹部入りしたの!!よろしくお頭!!」

「ああ．．．よろしくな。」と俺は、元気がいい子だなあと思いながら一晩を過ごすのであった。

翌日．．．

「赤河童よ．．．覚悟は決めてきたんだろうなあ？」とおれ

「分かっております．．．それでは！！」と掛け声がかかり二人は同時に飛ぶ！！すると、

「ぐっ！！なっ．．．何が．．．？」と言ってひざを抱える赤河童

「俺の居合いも見えなかつたか？正直言つて、俺は牙突より、居合いの方が得意なんだよ。まあ、とりあえず．．．仲間になるか？赤河童？」

「．．．．はい。宜しくお願いします．．．お頭．．．我ら河童党総勢60名世話になります。」

「よし！！今夜は宴だあ！！新しい仲間たちを祝して乾杯！！」．．．
．．．そして、宴が始まった．．．

宴の最中、俺を含む幹部会が開かれた．．．

「ふむ．．．では、これより総会をはじめ。まず、羽前を俺、羽後を蒼、越後を邪及び、玄、陸奥をキタク、そして、陸中を赤河童、お前に任せる。炎、お前は俺の参謀だ．．．みななもの！それで、よいな？」すると

「．．．異議なしです！！お頭！！」と幹部たち

「よし、次だ．．．総会の場所は羽前の俺の屋敷とする！！なお、俺の屋敷が本拠地だから！！以上で意義があるものは？．．．いなか、よし！！では、次に陸前の妖怪の攻略に移る！！誰か、あそこの妖怪で知っているものはいないか？」と聞くと．．．赤河童が「お頭．．．陸前には大層美しい女が陸前を支配しているとか．．．」

「ほう．．．おんなねえ．．．興味が湧いた．．．お前らはついて

くるな・・・俺一人で見に行ってくる。」

「「「お頭！！危険すぎます！！我々も一緒に！！」」」と幹部たち

「気持ち分かる・・・だが、お前らには自分が担当する土地にいき、地盤を固めてもらいたい・・・

邪と玄には越前に勢力を伸ばしてもらう。頼んだぞ・・・」

「「「・・・分かりました。お氣をつけて！！」」」

そうして、総会は終了した。

一週間後・・・

俺は、陸前にある雪山にきた・・・あいつらが言うにはここに敵の大将がいるという。そんなこんなで、探していると

「あら・・・お兄さん。お一人？？ねえ・・・私と楽しいことしない？」と女の声が聞こえた。

「まあ・・・大概予想していたが、やっぱり雪女か・・・」と俺は雪女を見る。

「滅茶苦茶美人じゃねえか・・・」そう、思わず口に出てしまうほど美人だったのだ・・・

「あらあ・・・褒めてもなにもでないわよ？お兄さん・・・それより、私と一緒に遊ばない？」

「うれしいけど・・・俺にも目的があつてきたんだ。どうだい？俺の仲間にならないかい？」

「ふふ・・・面白い人・・・人間のくせに私を誘うなんて・・・面白いわ！！」そういった途端に、冷気が俺を襲うが・・・俺に効くはずもなく普通にしていると

「あなた何者？私の妖気を食らっても平気なんて・・・人間じゃないわね・・・」と警戒する雪女

「ご名答。俺はもう人間じゃない・・・俺の名前は氷斬・・・どうだ？俺の仲間になんねえか？」

「！！！！氷斬！！なるほどね・・・河童はやられたわけか・・・それで、最後は私ってわけ？」

「いやいや・・・俺としてもあなたのような、美人を傷つける趣味はないし、殺す気もない・・・ただ、俺と共に天下を見てみないかい？」

雪女は思った・・・まさか、あの河童もやられるなんて・・・でも、何故かこの人を見ているととっても安心する・・・それに、この人は私を殺そうと思えば殺せたはず・・・決めたわ！！私、この人についていく！！

「本当に天下を取るきなの？？」と聞いてきたので・・・

「当たり前だ！！絶対に天下を取ってみせる！！」

「そう・・・分かったわ・・・これから宜しくね・・・あなた・・・」

「?????あ・な・た？どういうこと？」

「だって、惚れちゃったんだもの・・・仕方ないじゃない・・・」

「仕方なくねえええ！！あれ？そういえば、お前の名前ってなんなんだ？」と聞くと

「・・・私、名前なんてないの・・・分かっているのは雪女ってことだけ・・・」

「・・・そうか、じゃあ俺が名前をつけてやるよ！」

「え？・・・」

「そうだなあ・・・そうだ！！お前の名前は白雪だ！！どうだ！？」

「白雪か・・・いい名前ね・・・宜しくねあなた・・・」

「だから、あなたじゃねええええええ！！」

そんな感じで、俺は奥州を制圧したのであった。

「お頭も隅に置けないですね・・・こんな美女をたぶらかすなんざあ・・・」と炎がからかってくる。

「からかうな炎・・・だったら交代するか??俺の今の生活を見て

みる！！四六四中つきまとわれている俺の身にもなれ！！だつてさあ！寝ようと思つて布団に入ったら、既にあいつが入っているんだぞ！！どこの新婚夫婦だよ！！結婚どころか、付き合つてもねえよ！！むしろ、つきまとわれてるよ！！」

そういつた俺は、とんでもなく息切れを起こしていた。

「まあまあ、お頭そんなにあつくならずには……」「あつくなくてねえよ！」駄目だこりや……」

「あらあら、どうしたの？あなた？そんなに、荒れて何かあったの？」と元凶がきやがった……

「お前……何で……俺の布団に入つてたの？」

「あらあ……あなたつたら、あのことも忘れたの？私に、あんなことをしといて……もう！！いやだわあ」と元凶

「つつつ……！おつお前勘違いされそうな言い方してんじゃねえよ！！」と俺……何故か、周りの視線がいたい。

「もうつ！あなたつたら、照れ屋なんだから……つもう！！」

「……！！……うわああああああ！！！！」久しぶりに妖気が暴走した……

今日も平和である。

東北制庄！氷斬の出会い！？（後書き）

どうも武士道です。

次回は、過去編突入すると思います。

平和な日常・・・そして、戦乱の始まり・・・（前書き）

どうも武士道です。

更新頑張ります。

平和な日常・・・そして、戦乱の始まり・・・

「ふああ？ん？ああ・・・そうか。俺、暴走したんだっけ？」と周りを見ると氷づけの部下たちがいた。

一人の女を残して・・・

「ああ？あなた、起きたあ？」と話しかけてくる阿呆を無視して、眠気覚ましに外に出た。

「もう・・・つれないわねえ・・・」と朝食の準備を進める白雪。

「あゝ！やつと目が覚めた！さあゝて、飯でも「お頭あ！」「氷斬様！」ん？ああ・・・玄に邪か。どうした？今日は、総会はないぞ？」と俺がのんきに聞くと

「何をいつておられるのですか！？越中を攻略したのでそのご報告にまいったのです！！」と邪

「ああ・・・そうだったのか・・・ん？後ろの奴は？」と俺が言っていると、金色の着物を着た男が

「おつ俺！越中金黄雀組の棟梁の金黄雀つていいいます。どうぞよろしくおねがいます！」と元気よく話してくる若者。

「まあ・・・立ち話もなんだから、飯食ってけよ。そんな時話そうぜ？な？金黄雀？」と俺

「はっはい！！」と金。そんなに緊張しなくてもいいのに・・・

「「「お邪魔しまーす・・・なんじゃこりゃあ！？」「「「・・・まあ、驚くわな・・・普通

「実は、かくかくしかじかで・・・」と俺が説明すると

「それにしても、お頭あゝやりすぎですよ」と玄。

「すまん・・・今日中には溶けるから・・・」俺が、落ち込みながら入っていくと

「あらあ？お客さん？ちよつと、待つてね・・・今、盛るから・・・あつ！もちろん、あなたの分もあるわよ・・・はい！」と俺は、ご飯をもらう。

「ありがとよ．．．ん？つて違う！違う！何普通に喋ってんの！？俺！？」と混乱する俺

「お頭あ．．．この人誰なんです？お頭のこれですかい？」と玄．．凍らせるぞ。

「玄．．．ああなりたいか？」俺が指差すとそこには、氷づけの炎がいた。

「．．．．なんでもありません。」と玄

「しかし、お頭。その人、本当に誰なんです？」と邪．．お前だけが俺の理解者！！

「ああ．．この人は越前の妖怪のたい「この人の妻の白雪です。よろしく。」おおい！！」

「なんと！！これで、氷斬組も安泰です！！」と何故か号泣する邪．．．．もうやめてくれ！

「まあ．．その話は置いてだ．．金黄雀と言ったな？どうだい？俺の組にはいつちやくねえかい？」と聞くと

「待つてました！！私もそう思ってたところです。あの、邪鬼さんがさん付けで呼ぶからどんな人かと思いきや予想以上の方でした！！我ら、越中金黄雀組！お世話になります。」

「おう！よろしくな。」と俺

「はっ！俺は一体！？おっお頭！！すいませんでしたあ！」と土下座してくる炎

「まあ．．．ほら！飯でも食えや！」と俺

「はあ．．．」

「モグモグ．．．あっ！いいこと思いついたぞ！邪よ！うちの組の全妖怪を集めろ！！いいな？」と俺

「分かりました。しかし、一体何をなさるおつもりで？」

「ははは．．．お楽しみだよ．．．」

「「「「「?????」「」「」「」

翌日・・・

「もう集まつたんかい!!」

「はい。それと、ご要望の品も・・・」

「む？ああ、ありがとよ。邪鬼。」そういつて、俺は樽のふたをあけた。中身は、酒だった。そして、杯に盛り全員に配った。

「いいか!!この酒を飲んだら、我らは家族だ!!そして、この絆は絶対に砕けはしない!!いいな!?それでは・・・」と掛け声をかけると

「「「「「乾杯!!!!!!」」」」」・・・そして、宴会が始まった。

「流石ですな。氷斬様、こうして組の結束を固めるとは!」と邪

「ん？邪か？まあ・・・確かに結束を固める目的もあったが・・・単純に・・・家族が欲しかったのかもな・・・」そういつた俺は、悲しい顔をした。俺は、生前両親を早くなくし、唯一の家族の祖母も交通事故で亡くしてしまった。その日の俺は、とてもやつれていたという。その次の日に、俺は死神に殺されたんだっけか・・・「大丈夫よ!私たちがついてるわ・・・あなた・・・」と抱きついてくる白雪

「俺たちですよ!!お頭あ!!」と炎と玄・・・酔ってるな

「我々もですぞ!!」と金と邪

「私もだよ!」と蒼

「・・・俺もだからな」・・・どこからでてきた。お前ら？

「一人で悩まないで・・・私たちは家族なんですよ?」と白雪

「ああ・・・そうだな・・・ありがと。皆・・・」そうして、宴会は終わった。

その晩・・・

「俺は決めたぜ・・・死神。俺は、この組を・・・いや、この家族を守るために闘う!今の俺を見たらお前は皮肉をいうだろうな?だ

が、これが・・・俺の答えなんだ・・・必ず・・・必ず守ってみせる！」そうして、俺は眠った。
「・・・・・・・・・・死神？」そう・・・あいつが聞いてたことを知らずに・・・

翌朝、俺は白雪にたたき起こされて雪山の、今は使っていない屋敷に入った。

「あなた・・・・・・・・死神ってなんのこと？」

「！！！！なっ何のことだ？」ととぼける俺

「とぼけないで！私、あなたの昨日の独り言聞いてたのよ？」

「！！・・・・・・・・そうか、聞いちまったのか・・・わあったよ。何から何まで教えてやる・・・・・・・・」

そうして、俺は自分のことをすべて伝えた。死神のことも・・・

「・・・・・・・・やっぱりね。「えっ！？」」

「だって、あなた。初めて会った時から皆とは雰囲気が違うなあ・・・と思ってたのよ・・・成る程ねえ・・・そういうこと・・・「いいのかよ！！」「えっ？」

「俺のような、得体の知れない奴の部下になったんだぞ！！俺はお前も皆もだましてたんだ！！そんな俺を「なんだ？そんな事？」なっ！？」

「そんな事関係ないわ・・・だって私はそんなあなたを好きになっちゃったのよ・・・恋に理由何ていらないの・・・皆も分かっていたわよ・・・そんな事・・・」

「白雪・・・お前。」

「改めて言っわ・・・私はあなたが好きなの・・・どう？結婚してくださらない？氷斬様？」

「・・・・・・・・あぁ。分かったよ。結婚しよう・・・白雪」そういつて、俺は白雪を抱き寄せてキスをした。

「ん・・・・・・・・ふふっ！これで夫婦ね！あなた！」

「ああ・・・・・・・・そうだな・・・白雪・・・」

そして、改めて心に決めた．．．この組と白雪を守り通すと！！

一週間後．．．総会にて．．．

「お頭．．．関東にて奴良組と言うものが急激に勢力を伸ばしております。」と炎

「ああ．．．ついに来たか．．．大丈夫だ．．．心配ない．．．攻めてきたら潰すだけだ．．．いいな！！」

「「「「「はっ！！！！！！」」」」」

「そういえば．．．人間も戦が増えてまいりましたなあ．．．」と邪
「そんな事、俺らに關係ない．．．」とキタク

「でも、孤児もいっぱいいてるらしいよ」「そのことで話がある。」
えっ？」

「実はおめえらに、孤児を保護して俺の屋敷に送ってもらいたい。」

「「「「「なっ！！！！」」」」」

「分かってる。俺が可笑しいこと言ってることぐらい．．．だが、そこを頼む！！」

「はゝ仕方ないですねえ．．．うちのお頭は．．．」と炎

「いや、まったくですな！！」と赤河童

「だが、そこが氷斬様のいい所です。」と邪

「本当だよねえゝ流石は元人間ってことかな？」と蒼

「ふんっ！まあ．．．いいんじゃないか？」とキタク

「流石あなたねえ．．．考えることが違うわあ．．．」と白雪

「皆．．．ありがとう。子供たちは俺のところに送ってくれ．．．それと、玄！お前陸前の妖怪の頭になれ！」

「「「「「分かりました！」」」」」「了解です！」

総会が終わり、その夜

「いよいよか．．．戦乱の世．．．」

「え？何かいった？あなた？」

「いいや・・・何でもないよ・・・」そういつて、俺は月と雪を見ながら酒を飲んだ・・・。

平和な日常・・・そして、戦乱の始まり・・・（後書き）

次回はぬらりひょんと戦闘です。

ちなみに、金黄雀「金黄雀」ですからね。

ぬらりひょん登場！悲劇の始まり（前書き）

武士道です。

更新がんばります。

ぬらりひょん登場！悲劇の始まり

「お頭・・・子供たちが送られてきました・・・」と炎

「ああ・・・きたか・・・通してくれ・・・」すると、おびえている子供たちが来た。

「・・・ガタガタ・・・怖いよう・・・」

「大丈夫だよ・・・俺たちはお前らを食ったりしないから・・・俺も元人間だ・・・だから大丈夫だ・・・」

「・・・本当???」

「ああ、ほんと」「本当に決まってるじゃない！うちの夫は人間なんか食わないわよ！」おい！子供たちがびびってんだろぅが!？」

「おじさん・・・僕たちを拾ってくれるの?」と一人の子供が聞いてきた

「ああ・・・そうだよ。家にも君に似たような境遇の子がいるんだ。おいで、銀紗。」

「呼んだ？氷さん・・・」銀紗は目をこすりながら出てきた・・・

「銀紗・・・この子達は今日からここに暮らすんだ仲良くしてやってくれ・・・それと、顔を洗ってきなさい。」そういうと、はあゝいと言つてどこかに行つてしまった

「さあ・・・君たちも銀紗についていつて、遊んできなさい。」

「・・・うっうん!!」「・・・そういつて、子供たちは走つていつてしまった。

「あなた・・・城下町へ行きましょう。」

「ん？別にいいが、なんか欲しいものもあるのか?」

「ええ・・・そうなの。だから行きましょ!」

「分かったよ・・・なら行こうか・・・」そうして、俺らは城下町へと向かった。

「あなた！あなた！見て！珍しい食べ物があるわよ！」と大はしやぎの白雪・・・子どもかよ。

「ああ、そうだな。食べてくか？」

「そうね！食べていきましょ！」と白雪。ちなみに今俺らは人間に化けている・・・

「それにしても・・・この城下町は平和だなあ・・・」

「何でも、この国を荒らそうとする奴らは氷付けになるっていう噂よ・・・ねえ・・・あなた？」と白雪の氷のような声が聞こえた。

「あつ・・・ああ！そうだな！一体何処のどいつだ？そんなことをする奴は・・・」とごまかす俺

「もう・・・しょうがないわねえ・・・そうだ！この手ぬぐいあなたにあげるわ。」

「ん？何だこれ？」と俺が受け取ったのは、綺麗な青色の手ぬぐいだった。

「昨日、夜なべして作ったの・・・どう？」と頬を赤らめて俺を見てる白雪。

「ああ・・・とてもうれしいよ。白雪。」

「そつそつ？よかった・・・」と安心したような顔をする白雪

「それじゃあ、買い物の続きをしようか？」

「ええ、そうね。」

それから、いろいろ買って家に帰った。

「・・・お帰りなさい！！」「・・・」と俺たちに抱きついてくる子供たち

「うお！？お前らもうここには慣れたのか？」

「うん！みんな面白いしね！」

「そうか・・・よかった。それじゃあこれか「お頭！！大変です！・・・どうした？」

「つい先ほど赤河童より連絡がありました。奴良組がこちらに向かってきております！！」

「そうか・・・お前たち家の中に入ってな・・・銀紗、こいつらを頼む。」

「分かった・・・気をつけてね・・・」

「ああ・・・お前ら！行くぞ！！あいつらをつぶしに！」

「「「「「おお！！」「」「」「」

そうして、戦場に向かっていている途中で

「それにしても・・・どうやってここまで来たんですかねえ？お頭・・・」と炎

「分からん・・・だが、あっちがその気ならつぶすだけだ・・・」
「そうですね・・・やってやりましょう！！」

俺たちが山の近くまで来ると、一人の男が立っていた。

『お前さんが氷斬かい？なるほど・・・すごい妖気だな・・・こりや・・・』とぬらりひょん

「奴良組の大将がここに何のようだい？返答しだいでは・・・凍らすぞ・・・？」

『・・・お前さん、俺の部下になんねえかい？』

「！！！！ふざけたまねを！！氷斬様になんて事を！！」「いや、いい・・・えっ！？」と炎

「いやはや・・・面白い奴だ。しかしな・・・俺の後ろには守らなければならぬ者達がいるんだ・・・とりあえず・・・かかってこいや！？」と俺が一人で奴良組に突っ込んでいく・・・

「「「「なっ！！！！なんだあいつ！」「」「」と奴良組の幹部たち
「大将！俺に任せなあり」といつてきたのは狒狒である。

「俺の名前は狒狒！勝負だ「邪魔だ・・・」なっ！？」狒狒は一瞬で凍った。

『！！強いなあ・・・あんた・・・』

「お世辞はいい・・・死ぬか、生きるか。選びな・・・ぬらりひょん！！」そういつて、俺は刀を構えた。

「そうか？」と白雪を見ると唇にやわらかい感触があった。

「！！！！ぷはあ．．．急にやるなよ．．．びっくりすんだろっか．．．」

「ふふ．．．ごめんなさい。急にしなくなったの．．．」

「．．．．．はあゝまあいいや．．．寝ようぜ？白雪」

「ええ．．．あなた．．．」そして、俺らは一緒に寝た。

『くかかかか．．．．あれが、かの奥州の氷鬼の奥方か．．．．美しいのう』なぞの声が月夜に響き．．．．

「誰だ！！貴様、こんなところで何をしている！？」

『ん？貴様は確か．．．．おお！かの氷斬の右腕の炎猿殿では？？』

「いかにも俺が．．炎猿だ．．．こちらの質問にも答えてもらおう．．．．一体何をしている？」

炎猿は手から炎を出して戦闘態勢に入った。

『いやいや．．まさか、あの炎猿殿にばれるとは予想外でしたよ．．．．ここで、死んでもらいますよ！！』となぞの影は、黒い刃を投げてきた。

「つつつ！！貴様つ！くつ！火伽瑠羅^{ひかるろ}！」炎猿から巨大な炎が出てきて、刃ごとなぞの影を包んだ！！

『ぐつ！！流石は．．．炎猿．．．なんて炎だ．．．だが！影狩！』急に影から巨大な鎌が出てきて炎猿を襲う

「なっ！！ぐわああああ！！」

『ふう．．．なんとか勝てたか．．．危なかった、一歩間違えてたら炭になってたぞ．．．だが、いい影が手に入った．．．．』
そうして、影は闇夜に消えた．．．．

そのころの奴良組．．．．

「それにしても．．．総大将．．噂どおり奥州の氷鬼は強かったで

すな．．見逃してもらったからよかったものの．．．一歩間違えたら死んでましたぞ！！」

『なあに．．大丈夫さ。鴉天狗．．わしは生きておっただろ？』

「そういう問題ではないのです！！」

『それにしても．．面白い奴じやったのう．．もう一度会いたいものじゃ．．決めたぞ！！鴉天狗！わしは、あそこに修行に行つて来る！！』

「本気ですか！？総大将！死んでしまいかもしれないのですぞ！」

『大丈夫じゃ．．死にはせんよ．．鴉天狗、組を頼むぞ．．』

「．．．分かりました。お氣をつけて．．．」

そうして、ぬらりひょんは奥州に向かった．．．

ぬらりひょん登場！悲劇の始まり（後書き）

次回も戦闘はあります。
ヨロシク！

悲しき結末・・・幹部達の秘密（前書き）

どうも武士道です。

前回の文章で矛盾がありました。申し訳ありません。
これからも更新頑張るのでヨロシク！！

悲しき結末・・・幹部達の秘密

「ゴホッ！ゴホッ！」

「もうゝあなたが病気になるなんてねえ・・・」

「すまないな・・・白雪に皆・・・心配かけて・・・」

「いいのよ。ほらっ！早く元気になるためにたくさん食べなきゃ！」

俺は今・・・病気になるっている。朝起きたら、熱があった。子供達に元気に過ごさない・・・と言ったのに、このざまだ・・・情けない・・・

「お頭！お頭！大変です！」

と頭が痛い時に一人の部下がすごい顔で走ってきた・・・

「ごほっ！ごほっ！何事だ？」

「はっ！それが・・・」

と部下が悲しい顔をする。

「どうした？何かあったのか？」

「それが・・・炎猿様が・・・血だらけの状態で見られました・・・」

「！！！！何だと！？一体誰にやられた！？炎は無事なのか！？」

「はい・・・命に別状は無いようですが・・・意識が戻ってこない状態で・・・」

「そうか・・・命があるなら、それでいい・・・至急に幹部に伝えよ・・・警戒態勢をとれと・・・それから、キタクの妖怪忍者を使って、犯人を絞れ・・・いいな？・・・ゴホッ！ゴホッ！」

「大丈夫ですか！？お頭！？」

「なあに・・・ただの風邪だ・・・心配するな・・・」

「分かりました・・・」

そういつて、部下は行ってしまった。

「あなた・・・」

「大丈夫だ。白雪・・・必ず守ってみせるよ・・・お前も、この組も・・・」

・・・
俺は、誰かに見られている感じがしたが・・・その日は体調が優れなかったため、放置した・・・

一週間後・・・

「お頭・・・犯人が分かった・・・」

「そうかキタク・・・で？誰だった？ゴホッ！ゴホッ！」

「ああ・・・犯人は影弾^{かげひき}という妖怪だ・・・大丈夫か？お頭・・・？」

「ああ・・・大丈夫だ・・・それで？その影弾と言うのは？」

「それについてなんだが・・・正直いつて何処に所属しているかはわからなかった・・・すまない。」

「いや・・・よくやってくれた・・・それだけでも十分だ・・・お前は陸奥に戻って休め。」

「分かった。だが、お頭も気をつけるよ？あの炎がやられたんだ・・・ただの雑魚妖怪ではないことは確かだ・・・」

キタクはそういつて飛んでいつてしまった・・・

「それにしても・・・影弾ねえ・・・一体何者だ？とりあえず・・・この落とし前はつけさせてもらおうか・・・ゴホッ！『あんたが、奥州の氷鬼かい？・・・』」

俺が振り向くと真つ黒い装束を着た奴が立っていた。

『そのとおり！その凍てつくような妖気・・・あんたが氷斬だね？』

「確かに、俺が氷斬だ・・・炎をやったのはお前か・・・？」

『そうさ！俺がやったんだ！いやゝあれは危なかったねえ！一歩間違えれば俺が焦げてたぜ！！まあ・・・ここにきたのはあんたを誘拐するためだったんだが・・・』

誘拐？・・・一体どういうことだ？まあとりあえず・・・こいつクロス・・・

「えらく饒舌な奴だな・・・お前みたいな奴に炎がやられたとは・・・

・信じられんよ!!」

俺は冷気を影弾に向かって、向けた。しかし、炎が俺の冷気を打ち消した・・・

「なっ!! その炎は! 炎の炎か! ?」

『ふう〜! 流石は奥州の氷鬼・・・あんたの読みどおり、俺の畏れは相手の影を奪い・・・そいつの能力や素の力を自由に使えるんだ!!』

そういつた影弾は炎の炎をおれに向かって撃ってきた。

「ふっ・・・」

『何が可笑しい! ?』

「見てれば分かる・・・」

『なっ!! ? 炎が凍って! ? こっこの! 化け物めえ! ? うがああああ!!』

影弾の背中から巨大な鎌が出てきた・・・それを俺は凍らせた。

『なっ!! ? くつくそおおおお!!』

そうして、影弾は首から下を凍らされて捕らえられた・・・

「この影は返してもらうぜ? これは炎のだからな・・・答える・・・

・誰の命令でここに来た?」

『はっ! 簡単に言つと「そうか・・・ならいいや」がつ!』

影弾は全身を凍らされ砕かれた・・・

「がはっ!・・・病人なのに無理しすぎたか・・・それじゃあ家に

「あなた! 勝手に家を抜けだして!」白雪! ?」

その日の晩・・・白雪に世話をされながら、こっぴどくしかられた・・・

次の日・・・炎が目を覚まし、俺に土下座をして謝って来た。俺はそれを許し、いつもどおりの仕事に行かせた・・・そして、俺は今・・・

「白雪い・・・この前も来たぜえ・・・城下町・・・」

「いいじゃない・・・どうせ今は家にいても寝てるだけじゃない・・・薬を買いにいくついでよ。」

「別に俺も一緒に行かなくても「何かいった？」言ってますん・・・」

俺達はそれから、薬も無事に買いかえる途中に

『えくん。えくん。』

「どうした？ほらおじちゃんがおぶってやるから泣くな。な？」

『ウン・・・』

そうして、おぶるために背を向けたとき

「あなた！！！！？？？」

「なんだ？・・・あ？」

目の前に見えたのは血だらけの白雪と、刃を持った一人の子供。

『カカカ・・・獲物を間違えたが・・・まあいい。ヒサシブリダナ？氷斬？』

「てめえ・・・まさか、腐葉か？」

『まさか・・・我が復活するまでにキサマが奥州の氷鬼とよばれていようとハ・・・しかも、女まで作ってナ・・・驚いたよ・・・』

「貴様・・・どうやって生き延びた？」

『いやな？正直アブナカタンダ・・・あの時とつさに憑依をといて浮遊していたところ・・・人間がいてナ？そいつに憑依しなおしたのよ・・・』

「この・・・死にぞこないがあ！！！」

俺は冷気をあいつに向けた・・・

『いいの力？この女の命はないゾ？』

あいつは白雪を盾にした。

「！！くっ！」

おれはとつさに冷気を静めた・・・雪女とて凍ってしまうほど、俺の冷気はやばいのだ・・・だが、こいつ何故そのことを知っている？

「！！がはっ！ごほっ！ごほっ！」

『？？マサカ貴様病なのか？？カカカ・・・それはいい。イタぶっ

て「私の夫になにしてるのよ？・・・呪いの吹雪・蝸^{ひぐらし}」ナツ！？
クソがああああ！！」

腐葉は悲鳴をあげて、凍りついた。

「白雪！！怪我は大丈夫なのか！？」

白雪は腹から血を流していた・・・

「白雪！？」

「大丈夫よ・・・あなた・・・これくらい・・・うつ！？」

「！！無理するな！俺が今連れて行ってやるから！」

俺は白雪を抱えて急いで帰った。

「こいつはひでえ・・・どうだ？金黄雀？」

「大変危険な状態です・・・でも、絶対に治して見せます！」

「・・・・・・白雪。」

俺は、ただうつむいていた。守れなかったこと・・・白雪に申し訳
ないと・・・

「お頭・・・お頭！！」

「うお！？どうだった！金！白雪の様子は！？」

「・・・・・・」

金は首を横に振った。

「マジかよ・・・うわああああ！！」

そういつて、俺は雪山に向かって走り出した。

「俺は！また誰も守れなかった・・・ごほっ！畜生・・・こんな

力があるのに・・・俺はなんて無力なんだ・・・なんでだよ・・・

俺が何したって言うんだ・・・なあ！神様よお！！」

そうして、俺は天に吼えた・・・

その頃・・・

「いい？この事は夫に言ったら駄目よ？・・・」

「ああ・・・それは分かったけどよ・・・何故教えちゃ行けねえんだ？お頭喜ぶぜ？」

「分かってるわよ・・・そんな事・・・でも、あの人きつと自分のせいだと思い込んでるわ・・・もう少しあの人は心を強くしたほうがいいのよ・・・」

「・・・それもそうだな・・・分かった。言うとおりにしよう。何時、顔を見せるんだ？」

「そうねえ・・・今の戦乱の世が終わってからかしら？それまで、私はあの雪山の別荘にいるわ・・・何かあったら報告してよね？」

「分かった。このことは幹部達で秘密にする・・・いいか？金黄雀？」

「分かりました・・・」

「白雪・・・お前の分までこの組を守ってやる！そして・・・見てくれ・・・俺の生き様を！！」

そうして、俺は決意を新たに決め家に向かった。

その頃のぬらりひょん・・・

「くそっ！雪が深いのう・・・後ひと踏ん張りじゃ！！待っておれよ氷斬！」

ぬらりひょんは冬の山越えをしていた・・・

悲しき結末・・・幹部達の秘密（後書き）

次回は再びぬらりひよんです。

土蜘蛛でるかも・・・

次回もお楽しみに！！

土蜘蛛再び・・・もういいわ！（前書き）

こんにちは。 武士道です。
更新頑張ります。

土蜘蛛再び・・・もういいわ！

「お頭ぁ・・・元気出してくださいよ？あんなに白雪さんに誓ってたじゃないですか！」

「ああ・・・すまない。・・・あんな奴でも、いないと寂しいものだな・・・」

「お頭・・・失礼します。」

俺は、あれから家に戻りあいつらに誓ったことを話した。だが、翌朝起きたらやはり白雪がいないことに気付いて落ち込んだ・・・

「氷斬様の様子はどうだ？」

「ん？ああ・・・邪鬼か。どうもこうもないよ・・・朝からこんな調子だ・・・」

「まあ・・・無理も無い。お頭も辛いのだ・・・教えたくなる物だ。」

「邪鬼！絶対にお頭には教えるなよ！」

「ああ・・・分かっているとも。」

そうして、二人はお頭の影で応援するのであった・・・。

「・・・旅に出る！！！？？」

幹部達は俺の発言に目を見開いている・・・そりゃそうか・・・

「ああ・・・旅に出る・・・」

「正気ですか！？お頭・・・まさか白雪さんの事で??」

「！！！！赤河童・・・鋭いな・・・ああ・・・そのとおりだよ。しばらく、旅に出ようと思う。」

「お待ちください・・・」

「なんだ？邪？」

「何時ごろ・・・帰ってきますかな？」

「そうだな・・・今の戦乱が終わるころには帰ってくるよ。」

「そうですか・・・分かりました。お前もいいな？炎猿？」

「ああ・・・それなら問題ない。」

「????どういう意味だ？」

「いえ・・・なんでもありません。お頭が大きく帰ってくるのを楽しみにしております。」

「ありがとうな。邪鬼・・・お前らも達者でな・・・」

「「「「「いつてらっしやいませ!!」「」「」「」

「それじゃあ行つて来る・・・」

おれが行つた後の幹部達・・・

「大丈夫だろうか・・・お頭・・・」

「玄・・・心配するな・・・我らの大将だぞ。」

「しかし、赤河童よ・・・お頭辛すぎるぜ・・・」

「玄は心配性ねえ・・・」

「まっただ・・・そんな格好でよく言えたもんだ・・・」

「うるせえ！蒼！キタク！よけいなこと言うなよ！」

ギヤーギヤー騒いでいると

『お邪魔するぜ!』

「貴様はぬらりひょん!!何しに来た!？」

『おや?あんたは確か・・・「炎猿だ!」ああ・・・そうそう炎猿

だっけか?そーいや、氷斬殿は何処だい?』

「何のようだ？」

『そつちからいつてきたんだろう?鍛えてくれると行ってたじゃないか?』

「ああ・・・そーいえばそうだったな・・・赤河童!!遠野で鍛えてやれ!」

「!!わしがですかい?なん「お前、組の名前変えたいつて言つてただろ?これから、お前奥州遠野一家つて名乗れ。」・・・分か

り申した。」

「ついて来い・・・」

『おい待ってくれよ!赤河童とやら!』

そうして、ぬらりひよんは鍛えられていくのであった・・・

「とりあえず・・・関東渡って関西の方に行ってみるか・・・」
俺は山を越えて関東の甲斐に向かっていた・・・道中、俺は白雪のくれた海のような青い色の手ぬぐいを出す。

「分かっていた・・・生き物が死ぬのは世のつねだ・・・だけど・・・こんなに辛いとは・・・」

『あなた！これ私が作ったおはぎよ！食べてみて！』

『うお！急に出てくるな！子供達に字を教えたんだから！』

『悪かったわよ・・・でもあなたに食べて欲しかったのよ！』

『すまないな・・・もぐもぐ、！！美味いぞ！このおはぎ！』本当
！？『ああ本当だ。』

『うれしいわあ・・・ほら、あなたたちも食べなさい・・・』

『『『『わあ~~~~い！！！！』』』』

「・・・懐かしいなあ。あの日の事、あれがかなり昔のことに思えるよ・・・」

俺は、そういいながら寂しく甲斐に向かったのだった・・・

そのころの遠野・・・あらから一カ月後・・・雑魚妖怪たちの会話
「あつという間に行っちまったな・・・」

「ああ・・・それにしても雪麗の奴・・・なんであんな男について
いったんだろうな？」

「しらね・・・」

「そういえば・・・あいつ、何処に行くっていった？」

「確か・・・京都？」

「もしかしたら、お頭と会ったりして・・・」

「・・・京が氷の町になっちまうな・・・」

「だよなあ？・・・まあいつか！」

遠野は今日も平和である。

「おや？ここは京都か？いけね．．．また着ちまった．．．」「死ねえ！！」「．．．ん？ああすまんが京は一体ど．．．凍っちまってるか．．．ん？」

おれが見ると小柄の妖怪がおれを見て震えていた．．．

「ひい！くつくるな！この化け物！」

「．．．．お前もだろ．．．まあいいや！なあ．．．京はどうなってる？」

「うつうるさい！羽衣狐様が京を支配するのだ！」

「羽衣狐だと．．．．？おい、その話詳しく」「うわあああ！」「逃げられたか．．．」

俺が歩いていると人間が襲われていた．．．

「たったすけて！この子だけは！」

「ひゃひゃひゃ！助けるわけねえだろ！？し「ちよつと邪魔だ．．．ぎゃ！？」」

「？？？あなたは一体何なの？」

「ん？俺も妖怪だよ？」

「この子の命だけは．．．」「命なんていらないよ．．．」「えっ？」

「それより．．．今のこの京はどういうことだ？」

「そつそれが．．．」

女の話の聞くに妖怪が出没して肝をとっていく事件が多発しているらしい．．．まあ．．．羽衣狐の仕業だろう．．．まっぬらりひょんがなんとかすんだろ．．．

「いいか．．．この家に入ったら明日の朝まで出るな．．．そうすりやたすかるはずだ．．．」

「あつありがとうございます！あのあなたは．．．」

「俺か？俺は氷斬だ．．．それじゃあな！」

「氷斬．．．」

俺は吹雪を起こして消えた。

「ふう．．．ここは．．．にげ『久しぶりだなあ．．．』．．．こ

の聲は・・・」

『おらああああ！』

「土蜘蛛！？ぐっ！」

『はははは！そこなくつちゃ！次いくぜえ！』

「ちょ！まつ！？ゴホッ！ゴホッ！『なんだあ？病か？つまんねえ・

・さつさと治せ！』無茶言つなよ・・・」

『そうだなあ・・・じゃあ400年後どうだ？「何が？」勝負する時に決まってるんだろ？』

「マジかよ・・・『まじだぜえ・・・』みたいだな・・・分かった・・・

・その時にな。それじゃ『お前の名前は・・・？』・・・氷斬だ・・・

・覚えとけよ・・・」

そうして俺は消えた

『氷斬か・・・くは！楽しみだ・・・さあて俺は寝るかあ・・・

・・・』

そのころのぬらりひょん・・・

「やめろ・・・わしを殺す気かい？」

「もうつれないわねえ・・・ぬらりひょん様？」

「やれやれ・・・」

「総大将！氷斬らしき者を見たという奴がいました！」

「氷斬が？よし！会いに行くぞ！！」

「正気ですか！？総大将！？今度こそ殺されるかも知れませんか？！？」

「大丈夫じゃ・・・わしは死なぬ・・・」

「はあ・・・あなたの自身は何処から来るのやら・・・」

そして、奴良組は氷斬へと向かっていった・・・

土蜘蛛再び・・・もういいわ！（後書き）

次回は、羽衣狐登場です！
お楽しみに。

再会・・・（前書き）

どうも、武士道です。

もうちょっと、文を書くのを上手になりたいです。

それじゃあ、始めます！

再会・・・

「・・・ゴホッ！ゴホッ！くそ！こんな時に・・・！」

俺は今、羽衣狐のいる城に行く道を進んでいる。しかし、何で土蜘蛛が・・・？そう簡単に溶ける氷ではない筈なんだが・・・もしかして、誰かが裏で糸をひいてんのか？とりあえず、急いでここを離れなければ・・・

「お？何だこいつ？人間か？」

「ゴホッ！・・・あ？」

俺が上を向くと、羽がある妖怪が俺を見ていた。まずい・・・今の俺は発作の薬をまだ飲んでない・・・！

「誰もいねえな？・・・よし。死ねえ！」

「くそつ！があ！」

「うお！あぶねえ！お前氷の妖怪だったのか？死ぬとこだったぜ。」

「くつ！あんな奴に避けられるとは・・・」

俺は、奴が向かってきたときにでかい氷柱を作り、撃退しようとしたが避けられてしまった。本来の力なら、あの程度の妖怪に避けられるものではないのだ・・・

「それじゃあ・・・そろそろ死ねや！」

「くそつ・・・ここまでか・・・『ザシユ！ぎゃあ！』なっ！何だと！？」

俺に向かってきた妖怪は誰かに斬られて真つ二つになってしまった・・・誰だ？俺が目を凝らしてみると・・・そいつの目は漆のようなつやで、まさに闇を表しているような瞳をしていた。

「ぬらりひょんか・・・」

「ひさしぶりだのう？氷斬？」

「そうだな。大方魑魅魍魎の主になり来たって事か？」

「そうじゃ・・・よく分かったのう？」

「お前の考えていることなどお見通しだよ・・・」

「ハハハ！氷斬には適わんわい！そういえば、お主はこんな所に何しに来たのじゃ？」

「俺か？俺は旅をしていたら、ここに流れ着いただけだ・・・」

「旅？はは！相変わらず、面白い奴じゃ！」

「そりやどうも・・・じゃあ俺は行くぞ・・・」「まあ待つのだじゃ。何だよ？」

「一緒に酒を飲もうや。あんたも辛かったんじゃろ？」

「お前・・・誰からその話を・・・」

俺は怒りで妖気をはね上げた・・・

「おおっと！相変わらずすごい妖気じゃ・・・お前のとこの奴に教えてもらったのよ。」

「俺の？ああ、そうか。修行に來いって言ってたな・・・それでか。」

「そうじゃ・・・一緒に酒でも飲んで・・・忘れよう」

「・・・忘れることは出来ん。だが、酒なら付き合おう・・・」

「流石は氷斬じゃ！話が分かるわい！それでは行こうか、わしの宿へ。」

そうして、俺らはぬらりひよんの宿に向かった。

ぬらりひよんの宿にて・・・

俺は、今ぬらりひよんの宿にいる。そして、こいつと酒を飲んでいる。

「のう？氷斬？」

「ああ？何だ？」

「荒れておるのお・・・最初に会ったときとは大違いじゃ・・・」

俺が、やけになって酒を飲んでいると周りの妖怪たちがびくびくしながら飲んでいる・・・

一体俺は何をやっているんだ？

「すまん・・・取り乱していた・・・」

「いいのじゃ・・・おい、雪女！酒を持ってきてくれ！」

「はいはい。どうぞ・・・」

と差し出してくる美人・・・こいつは確か・・・

「ぬらりひょん・・・」

「なんじゃ？」

「よく見れば・・・俺の組の奴もいるじゃねえか・・・どういつ」とだい？」

「いやな？わしが遠野の地で仲間になつてくれた奴らじゃ！」

「仲間だと・・・？」

そして、俺は元氷斬組の奴らを見る。

「お前ら・・・覚悟は決めてんだろうなあ？」

「「「ひつ！」「」「」

「うつ・・・！」

と雪麗たちがびびる・・・

「・・・まあいい・・・」「」「えっ？？？」「」「もう・・・いいんだ。お前らの好きなようにすればいい。」

そうして、俺は酒の入った瓶を持って

「世話になつたな・・・ぬらりひょん。1つだけ忠告しておく。

羽衣狐には手を出すな・・・あいつは普通の妖ではない。それじゃ

あな・・・」

そついい残して俺は外に出た・・・

雪麗視点

「「お頭・・・ずいぶん疲れてるようだったな・・・大丈夫かな？お頭・・・」

「「馬鹿野郎！！俺たちの大將はもうあの人じゃないだろうが！？」

「「でも・・・氷斬様は俺たちに優しくしてくれたし、体張っても守ってくれたじゃないか！？」」

「ツツツ！！確かにそうだが・・・」

「今こそ！その恩を返すときじゃないのか！？」

「・・・・・・・・・・」

「恩ねえ・・・」

雪麗は思い出していた・・・初めて氷斬にあつたときのことを・
氷斬は、私の土地遠野に視察にやってきた・・・私は白雪様を倒したって聞いてどれほどの腕か試してやろうと思った・・・そのときだった

「氷斬め・・・その腕、試してやろうじゃないの！待ってなさい！氷『お嬢ちゃん・何処行くの？』えっ？」

「ここは、女の子一人だとあぶないよううう！」

そういつて、あの妖怪は私を襲ってきたわ・・・でも、

「きやああああああ！『おおつと、またトラブルかよ・・・』えっ！？」

「誰だてめえ！・・・殺してやる！し『ああ・・・すまん。時間がな
いんだ。』ぎゃ！」

あの人は、その妖怪を一瞬で凍らせてしまった。・・・すごい・

「こいつはこの前倒した雑魚集団の一匹か？まあいい・・・お嬢ちゃん。大丈夫かい？」

「うっうん！／＼／／」

何よ・・・格好いいじゃない・・・

「「「おいっ！聞いているのか！？雪麗！？」」」

「えっええ！聞いてたわよ！？」

「嘘だな・・・まあいい！もう一回言うぞ！？俺達は氷斬組に戻る！「えっ！？」あの人には返しきれないくらいの恩がある。俺はそれを返したい・・・お前らもだよな！！」

「「「おおお！！」」」

「お前はどつする？」

「・・・行かないわ・・・私はもう奴良組よ・・・」

「そうか・・・達者でな・・・」

そうして、彼らは行ってしまった。．．．私はどうしたいのかしら？それに、この感情は一体．．．？

「ここが、奴のいる城か．．．」

一方、氷斬は羽衣狐のいる城へと向かっていった。後ろから仲間がついてきていることも知らずに．．．

再会・・・（後書き）

次回は羽衣狐との戦闘です。
次回もお楽しみに！

氷斬復活！（前書き）

どうも武士道です。
更新頑張ります。

氷斬復活！

「なんだ？てめえ？ここが何処だか「すまん。邪魔だ・・・」がつ！」

「ぐほつ！・・・早く次の場所に行かなければ・・・」

俺は、京都を出るために城を横切らなければいけなかった。なぜかと言うと、ほかの道は京妖怪どもに止められていたからである・・・早く行かなければ・・・厄介ごとに巻き込まれる前に・・・

「おや？そちは確か・・・」

俺が休んでいると、いかにも偉そうな服を着た女がいた。・・・マジかよ・・・

「・・・羽衣狐か・・・何のようだ？」

「ほほほ・・・やはり、あのときの男か・・・もう一度聞く。どうじゃ？わらわの部下にならぬか？」

「何回も・・・言わせるな・・・俺はあんたの仲間になる気はない・・・」

「残念じゃのう・・・それならば、死ね！」「」「お頭あゝ！」「」「何？」

「！！・・・お前ら、何してんだ？もう、お前らは氷斬組ではないだろう！？お前らは奴良組だ！早く、ぬらりひよんの所に戻れ！」「お頭あ・・・俺らはあんたに恩があるんでさあ・・・だから、こんな時位・・・俺らを頼つてくださいよ？」「・・・お前ら・・・」「行くぞおおおお！！」「」「おおおおおお！！」「」「しねええ！羽衣狐えええ！」

「よせ！お前らじゃ、こいつには敵わない！」「うるさい奴らじゃ・・・」「あつ・・・」

俺がそういつた時には、もう既に元部下達が血まみれになって地面に倒れていた。

「そういえば、そなた。愛した妻をなくしたそうじゃな？」

「白雪・・・・・・・・」

『大丈夫よ・・・あなた・・・これ位・・・うっ！』
『白雪！？』

俺は、あの時の事がフラッシュバックのように思い出した。

「まったく、腐葉と影弾め・・・もう少し役に立つかと思ったが・・・予想以上に使えん奴じやったな・・・二人でたった一人しかこるせんとは。」

腐葉に影弾だと・・・・・・・・？じゃあ、こいつが・・・白雪を・・・コロシタノカ？そのとき・・・俺の大事なものが切れたような感じがした・・・・・・・・

「うがあああああああ！！！！！！」

「何じゃ！？この妖気は！？まずい！凍る！」

雪麗視点

「はあ・・・はあ・・・どうしよう・・・やっぱり気になって来ちゃった・・・・・・・・」

あれから、私はやっぱり気になってあいつらの後をつけてたんだけど途中で見失って、探している所だ・・・それから、目の前に青色の手ぬぐいを首にまいた男が立っていた・・・

「あつ！いたつ！氷「うがあああああああ！！！！」えっ！？」
氷斬が吼えたと思ったら、一気に冷気が吹き出して周りの家が一瞬で凍りついた・・・・・・・・

「つつつ！なんて、妖気なの！？私までも凍りつきそう・・・」

吼えている氷斬を見ると、何か悲しみと怒りで吼えているようだった・・・・・・・・

「氷斬・・・・・・・・」

私は、恐怖で動けなくなっていた・・・

羽衣狐視点

「うるさい奴らじゃ・・・」

わらわは雑魚妖怪共を蹴散らした。すると・・・

「うがああああああ！！！！」

とんでもない妖気と共に巨大な冷気が吹き出てきた・・・その冷気は周りの景色を一瞬で絶対凍土の世界に変えてしまった・・・わらわは、とつさに尻尾で防ぐがだんだん凍りついてきた。

「何じゃ！？この妖気は！？まずい！凍る！？」

「羽衣狐様！何を！？ぐわあああああ！」

とつさに尻尾で雑魚の鬼を掴んで防いだが、鬼は一瞬で凍ってしまった。くっ！なんて妖気じゃ！このままでは！

「羽衣・・・狐ええええええ！！！」

男は冷気を吹き出しながら突進してくる・・・まずい！やられる！

「「羽衣狐様！お逃げください！」」

いきなり出てきた、鬼童丸と茨木童子の攻撃によって氷斬は一瞬止まった。逃げるなら今しかない！そうして、わらわは城の中に駆け込んだ・・・

氷斬視点

「羽衣狐ええええ！！どこだああああ！！！？？」

・・・俺は一体何をしているのだ？自分でも分からない・・・自分が何をしているのか。何も分からない・・・何も・・・

「貴様を通させはしない・・・」

「うるせえなあ・・・」

「だれだあ？てめえら？」

誰が敵なのかも・・・分からない・・・

「怒りで我を忘れているのか・・・？しかし、何という妖気・・・凍りつきそうだ・・・」

「鬼童丸・・・」

「分かっておる・・・ここは、引かせてもらう・・・さらば！」

「ああああああ！何もかも・・・凍ってしまええええ！」

俺は一体どうすればよいのだ・・・白雪・・・

「うああああああ！ちくしょおおおお！！」もうやめて．．．．「なっ？」

俺が後ろを見ると．．．．白雪．．．．？しかし、もう一度見ると似ているが別人だった．．．。

「もうやめて．．．．これ以上は．．．．あなたが可哀想過ぎる．．．．」

「お前は．．．．「覚えてないの？」．．．．雪麗か．．．．？」

「そうよ．．．．もうやめて．．．．これ以上は．．．．あなたの体が．．．．」

「！！雪麗．．．．」

よく見ると．．．．雪麗は体が凍りつきはじめていた．．．．俺が、周りを見ると絶対凍土の風景が出来上がっていた．．．．俺のせいだ．．．．早くぬらりひよんの所に連れて行かなければ．．．．！俺は、雪麗を抱いて自分が出せる限りの最高のスピードでぬらりひよんの宿に向かった。

雪麗視点

「羽衣．．．．狐えええええ！！」

「氷斬．．．．そんなに白雪さんや仲間達の事を．．．」

私は、さつきから足がすくんで動けなかったがだんだん動けるようになっていた。しかし、これ以上近ずくと私まで凍ってしまう．．．．でも！そんな事いつてる場合じゃない！！私は走り出した．．．．だんだん体が凍って行くのが分かる．．．．そして、やっと氷斬の元にたどり着いて

「もうやめて．．．．」

そして、私は氷斬を包むように抱きついた．．．．途中で氷斬がなんか言ってたけど、私はそこで意識を失ってしまった。

「頼む！雪麗を救ってやってくれ！後生の頼みだ！！」

宿に着いた俺は土下座をして、ぬらりひよんに頼みこんだ．．．．

「一体？何をしたんだというんじゃない？」

「それは後で話す！とりあえず、今はこの娘を！」

「分かった・・・おい！雪麗を診てやりな！」

「分かりました・・・」

そういつて、ぬらりひよんの部下達は雪麗を運んでいつてしまった。

「さて・・・何をしたんじゃない？教えてくんねえか？」

「ああ・・・分かった・・・」

そして、俺はさっき起こったことをすべて話した・・・

「なるほどのう・・・先ほどの妖気はお前のもんじゃったのか？」

「気付いてたのか？」

「阿呆！あれだけの妖気を出せば、誰だって気付くわ！」

「すまねえ・・・それじゃあ・・・俺はこれで・・・「見ていかねえのかい？」・・・俺にはそんな資格はない・・・じゃあな・・・」

そうして俺は宿を後にした・・・

「・・・俺のせいだ。あの時、俺が力を抑えられていればこんなことには・・・」

俺は、京都を出る道の入り口で止まっている・・・

「仲間は殺され、自分は暴走して仲間を傷つけてしまった。俺には人の上に立つ資格なんて「何言つてんのよ！？」雪麗！無事だったのか！？よかった。」

俺は無事だった雪麗にうれしさのあまり抱きついた。

「ちょ・・・／＼／＼何すんのよ！！「ぐばあ！」」

俺は雪麗の殺人ビンタを食らった・・・でも、よかった・・・無事で。

「まったく、白雪にそっくりなのは容姿だけじゃなくて、性格までもか・・・」

「悪かったわね！きつい性格で！」

雪麗は俺に往復ビンタを食らわしてくる・・・痛いんだけど・・・

「それより、あなたこれからどうするの．．．？」

「とりあえず、出羽に帰ろうと思う．．．」

「そう．．．．．気をつけてね．．．．」

「何か言ったか？」

「なっ／＼何でもないわよ！／／／」

「はあ？」

と顔が赤くなる雪麗．．．．熱でもあんのか？．．．まさか！俺のせいで！？

「すまない雪麗．．．俺のせいで．．．こんな事に．．．．」

「何よ．．．改まって．．．」

「本当にすまなかった。」

「もう、いいのよ！ほら！さっさと行きなさい！」

「ああ．．．ん？ああそうだ、雪麗！」

「．．．．何よ。」

「いつでも帰って来いよ．．．奥州はお前の故郷なんだからな。それと．．．ありがとな。目が覚めたよ。」

「／／／／うつつるさいわね！早く行きなさいよ！」

「ああ．．．それじゃあな。」

俺はそういい残して京都を去った．．．．帰りの途中、俺は出羽に帰ったらの事を考えていてあることを思いついた。俺も心身ともに鍛えなおさねばならねえな．．．．む？そういえば、いつもの発作がこないなあ．．．．もしかして、精神的な病だったのかな？そんなことを考えながら俺は出羽へと向かった。

氷斬復活！（後書き）

次回は再び東北です。
これからもヨロシク！

故郷へ到着（前書き）

どうも。 武士道です。

下手くそな文章ですが頑張ります。

故郷へ到着

「ここからが出羽か．．．．．懐かしいな．．．．．って言っても長くは旅してねえんだけどな．．．．．」

俺は、そんな独り言を言いながら出羽の入り口まで来ていた．．．．．さて、帰るか．．．我が家に。

「待て！その者！ここから先は氷斬組の縄張りだ！何処の組のものだ！？」

と話しかけてくる猿がいた．．．．．ん？あいつは．．．

「もしかして．．．．．炎か？」

「誰だ？俺の愛称を知っているということは氷斬組の者か？「俺だよ．．．．．炎．．．．．」！！お頭！？どうしてここに！？旅に行つてたんじゃ！？」

そうか、俺の今の格好は顔隠してんだった。まあ．．．とりあえず元氣そうで良かった．．．．．

「すまないな。心配かけた．．．旅はもう終わりだよ．．．十分に心は癒せた．．．もう、大丈夫だ。」

「．．．．．お頭。何か、また大きくなって帰ってきましたね．．．．．以前のお頭とは別人のようであ．．．」

「そうか？とりあえず、積もる話もある．．．家に帰るぞ．．．．．」
「分かりました。」

そうして、俺と炎は我が家に帰った。

「．．．氷さ〜ん！お帰りなさい！」「」

俺が家についたのは炎とあった日の昼間ちょうどだった。家に入ると子供達が出迎えてくれた。そして、それにつられて部下達もやってきた。

「お前達！元気にしてたか？」「」「うん！」「」そうか．．．良かった。」

「氷斬様・・・お久しゅうございます。」

「邪か！久しぶりだなあ！」

「ふっ・・・」「何で笑う・・・？」「いや・・・炎が言ったとおり以前より大きくなってきましたなあと思ひまして・・・」

「そうか？それより、今の組の状況は？」

「はっ・・・その話は後日にしましょう。今は宴会を開きましょう。これで、組の士気もあがりましょう。私は幹部達を集めてまいります。」

「おお・・・頼む。」

「それでは・・・これにて。」

そういつて、邪は行つてしまった。何かあいつ嬉しそつだつたような・・・まあいいか・・・

「お頭！「ん？何だ？」宴会は今晚と言う事でよろしいですか？」

「ああ。それでいい。」

「それでは私もこれにて・・・」

炎もなんか張り切つて行つてしまった・・・何だつてんだ・・・？ふああ・・・眠いな・・・とりあえず、昼寝でもするか・・・俺は寢床に向かつた。

「・・・氷さくん！遊ぼう！」「・・・」

と子供達が走つてやつてきた。・・・俺は寢たいんだが・・・仕方ないか。

「ああ・・・いいよ。」「・・・わあゝい！」「・・・はあ。」

それから、2時間くらい遊んであげて子供達が眠り俺も寝るかと思つたところ

「お頭！！久しぶりに将棋でもさしませんかね！？」

と炎がやつてきた。・・・寝させるよ・・・

「別にいいが、お前準備はどうした？」

「準備なら今、部下達がやっていますよ。それより、どうですか？一局？」

「ああいいぞ・・・」

それから、1時間後・・・

「やっぱり、お頭は強いんですね・・・適いませんよ・・・」

「ははっ！お前も強くなつたじゃないか・・・もう少しで俺が負けそうだったよ・・・」

「ご謙遜を・・・圧倒的じゃなかったですか・・・」

「そうかい？まあ・・・俺はもう寝るから「お頭、幹部がそろいました・・・さらに、宴会の準備も終わっております。」・・・マジで？」

「マジです。」

結局ねねえじゃなかよ・・・まあ・・・準備が出来たならしかたねえか。俺は目をこすりながら宴会場に向かった。

「「「「お頭！！！！お久しぶりでございます！！！！」」」」

「

「ああ。久しぶりだな、お前達。」

「・・・・・・」

「何だ？蒼？」

「お頭・・・何か変わったね・・・旅に出るときは荒々しかった妖気も今じゃ静かで穏やかな妖気になつてる。」

「そうか？」

「「「「「コク。」」」」」

一斉に首を頷く幹部達・・・俺、そんな妖気だったのか・・・
「うれしいねえ・・・よし！とりあえず・・・乾杯！」

「「「「「乾杯！！！！！！」」」」」

そうして、宴会ははじまりその宴会は朝まで続いた・・・

「「「「「修行?????」」」」」

「ああ・・・俺は修行に行つて来る。」

「また、旅に出るとかいうんじゃないでしょうね？」

「安心しろ。あそこの雪山の別荘を居城にしながら修行しようと思

け。」

「分かりました。」

そういつて、玄は炎たちの元に向かった。さて、再び狙うとしますか……天下を。

故郷へ到着（後書き）

次回は勢力拡大です。

磐城のたたかい―新たな幹部―（前書き）

武士道です。

更新頑張ります。

磐城のたたかい―新たな幹部―

「お頭！準備が出来ました！」

「ん？そうか・・・今行く」

俺は白雪にもらった手ぬぐいを首に巻き、立てかけてあつた不月をとって

「・・・行ってくるよ。」

そついい残して俺は外に向かった。

「ここが、陸前か？随分変わったな？」

「お頭！気を引き締めてくださいよ！これから闘つて時に！」

「悪い悪い・・・」

俺らは今、空緋護そらひごという巨大な虫の妖怪に乗って磐城まで来た。玄の話によると攻撃といつても俺らの領地ぎりぎりのところを攻撃してくるそうだ。

「お頭・・・着きました。」

「ん？もつ着いたのか？」

俺が下を見下ろすと巨大な屋敷が見えた。・・・玄の屋敷って俺ん家よりでかくね？

「はあ・・・」

「どうしたんです？お頭、溜め息なんてついて・・・」

「いや・・・なんでもない。それより、早く終わらそう。」

「???分かりました。」

それから、俺たちは玄の屋敷で休憩して磐城へと向かった。

雷鳥視点

「らッ雷鳥様！」

「何事だ？我は忙しいのだが・・・」

「そつそれが・・・」

「何だというのだ？」

「上空に氷斬組の連中が．．．「何だと！？見張りは何をしておるのだ！」それが．．．すでに玄鬼によってやられていました．．．玄鬼だと！？あの臆病者め！やっとなでてきおったか！どれ．．．我が倒して「それが．．．」どうした？まだあるのか？」

「ひよ氷斬が．．．きております．．．」

「！！！！？？氷斬だと！？馬鹿な！何故こんな偏狭の地に！？」

「おそらく．．．玄鬼が救援を頼んだのでしょう．．．」

「おつおのれえええ！全員戦闘態勢に入れ！迎え撃つぞ！」

「お頭．．．いいんですかい？こんなに大雑把に來ちまって．．．」

「いいんだよ。こうすれば、相手は動揺するだろう？そこをやつちまいばいい．．．」

「なるほど．．．」

「それに多分その雷鳥というのは相当な「貴様が氷斬か！？」ほら来た．．．」

下を見ると雷を纏った天狗がいた．．．結構な妖気だな．．．
・玄といい勝負か？

「お前が雷鳥か？」

「そつだ！我が雷鳥だ！」

「お前よお！俺の部下にならんか？」

「何だと！？ふざけるな！！全員かかれ！」

「うお！やつぱり交渉決裂か？玄！雑魚を頼む！「分かりました！行くぞ！てめえら！」」

玄は自分の部下を連れて雑魚妖怪を蹴散らしにいった。

「．．．貴様なら一瞬だろう！？」

「何だ？何か不満でもあるのか？」

「不満だらけだ！貴様！我らに恥を掻かせるつもりか！？」

「いや、そんなつもりはない。ただ、単純にお前と戦いたいただけだ。」

・
」

そういつて、俺は刀を抜いて構えた。

「・・・ふははははは！貴様は馬鹿か！？ここは空中・・・貴様に勝ち目はない！」

雷鳥は雷をだしながら突っ込んできた・・・

「氷牢・・・」「なっ！？」考えが甘いぜ・・・雷鳥？」

「くっ！万雷！」

「むっ！」

俺は雷鳥が突っ込んできたのを見て、タイミングを見計らって氷の牢を作り自分と雷鳥を閉じ込めた。それに、反応して雷鳥は雷を四方八方に撃ちまくった・・・しかし、氷は壊れない。

「くっ！壊れんか！なら、もう一度・・・」「遅い・・・牙突：王牙！」がっ！」

雷鳥は肩を貫かれて、下に落ちた・・・さて、再交渉と行きま
すか・・・

「・・・頼みます。この者たちはご勘弁を・・・」

「・・・許す。「おお・・・それでは。」お前もだぞ？雷鳥？」

「どういうことです！？我は敗軍の大將ですぞ！？」

「関係ないね・・・だから、俺らの仲間になつてくれよ？」

「・・・分かりました。我ら、鳥狼山雷鳥組お供いたします！」

「ははっ！ありがとうよ。それより、雷鳥？「何でしょう？」お前、わざと食らったな？あの一撃・・・」

「ばれておりましたか・・・」「何故避けなかった？」戦いが長引けば・・・仲間が死にます。それに、あなたを見たとき・・・私は負けてしまいました・・・気高い瞳で見られたとき体がすくんでしまったのです。」

「そうか・・・じゃあ杯でも交わすか！」「はい。」

そうして、俺らは磐城を制圧して新しい幹部雷鳥も加わった。その夜に俺と雷鳥は杯を交わした。

後日・・・出羽に帰った俺は再び剣の稽古を始めた。それから、二日後・・・

「お頭！」「炎か？どうだった？」はい！見事に岩代を制圧してまわりました！」

「そうか・・・それで？大百足党は？」

「はい・・・こちらに・・・」

「お初にお目にかかります・・・大百足党党首の大百足です。」「おお・・・お前が大百足か？」はい・・・実は氷斬様に折り入って頼みたいことが・・・」

「何だ？」

「私と杯を交わして欲しいのです！」

「何だ？そんなことか？いいぞ。」「真ですか！？」「ああ・・・本当だ。」

「ありがたき幸せでございます！これからよろしくお願いします！お頭！」

「おお！ヨロシクな！」

そして、俺は大百足とも杯を交わした。

「おっお頭！」「何だ？騒々しい・・・」港に妖怪集団がきました！」

「はっ・・・？」

俺は炎と一緒に空緋護にのり港へと急いだ。

「いやゝそれにしても大百足たちが仲間になってくれたおかげで移動が早くなったな・・・」

「そうですねゝあつしもあいつらがあんなに足が速いとは思いませんでしたよ・・・ってそうじゃなくて！どうするんですか！？お頭！？」

「まあ・・・攻撃してきたらやり返せばいいだけだ・・・そうだろう？」

「！！確かにそうですが・・・」

「だろ？だったら気ままに行こうぜ・・・」

「はぁ・・・分かりましたよ・・・気ままに行きましょう」

そうして俺たちは港へと向かった。

磐城のたたかい〜新たな幹部〜（後書き）

次回も勢力拡大です！
お楽しみに！

氷斬と海賊（前書き）

どうも。武士道です。

最近、緊張して書きにくいです。

これからよろしく。

氷斬と海賊

「おお！？あんたが氷斬組の氷斬かい！？」

俺達が港に着くといきなり大声を張り上げて俺を呼ぶ声がした・・・
・あいつ・・・馬鹿か？ここには人間もいるんだぞ・・・？ちなみに炎は人間に化けている、これが、以外にイケメンなのだ・・・俺は、始めてみたとき驚きで声が出なかった。すると、行きつけの団子屋の親父が出てきた。

「あれ？宗さん？あれ、あんたの知り合いかい？何かあんたに向かって話しかけているけど？」

「いえ・・・知りませんね・・・」

ちなみに俺の人間のときの名前は氷渡 宗だ・・・ご存知のとおり、俺が人間だった頃の名前だ。

「それにしても、宗さん？「何です？」氷斬組って確かあんたが従えているこの傭兵集団じゃなかったかい？」

「ええ・・・そうですけど・・・」

「じゃあ、あんたに用があんじゃねえのかい？」

「分かりません・・・一度会ってきます。これからよろしくお願いしますね？団子屋のおっちゃん。」

「おう！じゃあな！」

実は俺は氷斬組を表では傭兵集団としてやっている。この前も出羽の戦国大名から依頼を受けて来た所だ・・・しかも、俺は戦国大名とは結構仲がよいのである・・・特に東北の戦国大名は俺とは結構仲がよいので、俺は自分達の事を妖怪だということを教えたところ・・・最初は驚いていたのだが、友なら妖怪だろうが関係ないと言われた。あいつらのおかげで俺は出羽でも平和に暮らしている。
「お頭・・・それにしてもあいつは何しに来たんでしょうね・・・」

「俺が知るはず無いだろ？とにかく会いに行かねばな・・・」

俺らは急いで船着場へ向かった。

???視点

「船長……あいつ、本当に奥州の氷鬼ですかい？あつしには信じられませんかねえ……」

「アニキ……あいつからは、とてつもない力を感じる……あいつが氷斬で間違いは無いだろう……」

「アニキがそういうなら……」

「ふふふ……楽しみだな……早く来い……氷斬……」

「何か用か？この奥州の出羽の地に？」

俺は船着場について、船長らしき男に警戒しながら話しかけた。

「まあ、そう構えるな……俺はあんたと話したいだけだ……」

「

「話だと……？」「そう、話だ……船に乗れよ？酒もある……」

「……いいだろう。行くぞ？炎？」

「分かりやした……」

そうして、俺らは船に乗り込んだ……

「ようこそ！氷斬殿！俺の船へ！」

「ああ……それで？あんたの名前は？」

「ああそうか……名乗るのが遅れたな？俺の名前は波河鬼（なにか）なみがき」この船の船長だ！」

「そうか……波河鬼殿は俺と何の話がしたいのだ？」

「ああ……あんたの実力が知りてえ……」

「俺の実力？」

「ああ……だがその前に俺がここに来た理由を言おう……ここに来たのは、新たな主君を探しに着たんだ……」

「主君だと……？」

「ああ……そのことについては今から説明する……まあ聞いてくれ……」

波河鬼の話によると、波河鬼達は元は四国の武士だったそうだが戦の途中に何者かに殺されたらしい・・・主君を守れない無念で波河鬼という妖怪になり、新たな主を探しに船で旅に出たが、中々主が見つからず・・・とうとうここ、奥州の出羽まで来てしまったらしい。そこで、俺の噂を聞いてここに来たようだ・・・なるほどなあ・・・いいだろう！今晚、この場所で闘ってやる。そこで、俺の器を確かめるといい・・・」

「ああ！そうさせてもらうぜ！」

俺と炎はそうしてその場を後にして、家に帰った。

その晩・・・人間達が寝付いた所・・・

「お頭！本当についていなくていいんですかい？」

「ああ・・・行つて来る・・・」

「分かりました・・・頑張ってくださいよ！」

そうして、俺は港に向かった。

「おう！来たな！」

「くるに決まってるんだろ？」

「はは！流石は奥州の氷鬼！じゃあ！行くぜ！」

ちなみにこの波河鬼・・・滅茶苦茶戦国バサラの長宗我部元親に似ている・・・っていうか瓜二つだ・・・しかも、武器も同じなんですけど・・・

「！！！！早い！！？」

しかも、こいつ攻撃がめっちゃはやい・・・

「ははっ！ついてこれねえか！？氷斬！」

「なめるなよ・・・氷碎竜！」

氷の竜が波河鬼に当たる直前に爆発した・・・この技は相手を目隠しするだけではなく、相手の動きを封じるための技である・・・

「なっ！くそ！体がうごかねえ！」

「遅いぞ！？居合い・・・霧雨！」

俺は峰打ちの状態の居合いを海河鬼に放った……

「がっ！これは……峰打ち！？……はは……参ったぜ……
こんなに強いとは……」

「俺の勝ちだな……？」

「ああ……あんたの勝ちだ……なあ……何だ？」あんたに頼みがある。」

「言ってみろ……俺をあんたの部下にしてくれよ……俺の部下にだと？」

「ああ……そうだ。あんたの部下にしてくれ！頼む！」

「……いいだろう。じゃあ早速おれと杯を交わすとするか？」

「ああ！よろしく頼むぜ？お頭？」

「おう！よろしくな？海河鬼！」

そうして、俺らはその晩杯を交わした……

「そうですね〜じゃあそいつらには海のほうを頼んだらどうです？」

「海だと……？」

俺らは家に帰って海河鬼に何処の領地におくかで相談していた。

「ええ……どうやら海河鬼達は海を自由に行動できるようですし……

・ 実際、蒼からも頼まれてたんですよ？もうちょっと、海の妖怪を統一した方がいいって……」

「海か……頼めるか？海河鬼？」

「任せてくれ！お頭！俺達がささと制圧してくるからよ？」

「ああ……頼んだぞ？海河鬼。」

「おう！行くぞ！お前らあ！」

「……分かったぜ！アニキ！大アニキ！」

そう叫んだ海河鬼達は港に向かって走っていった……

「……」

「……」

「うるさい奴らでしたね……」

「……そうだな。」

そうして、俺らは将棋を始めた・・・。

翌日・・・。

「「「氷さ〜ん!」「」」

「お？お前らか？どうした？」

俺は昼間に炎が呼んでいるというので、行く途中に子供達に止められた。

「遊ぼうよ!？」「「「遊ぼう!遊ぼう!」「」」

「ん〜すまないな・・・実は炎に呼ばれてんだ・・・だから後でな？」

「「「「・・・分かった」「」」」

「それで？何のようだ？炎？」

「お頭・・・今後の方針はどうするおつもりで？」

「そうだな・・・能登、佐渡、加賀を制圧するつもりだ・・・」

「そうですね・・・それが妥当でしょう・・・ですが・・・何だ？」何故関東の奴良組を攻めないのです？」

「あいつは見てて面白いからな・・・興味があるのさ、あいつの組には・・・」

「そうですか・・・それがお頭の考えなら何も言いませんよ・・・」

「すまねえな・・・炎」

「いいえ・・・お頭にも何かの考えがあるんでしょう・・・」

そういつて、炎は部屋を出て行ってしまった。

さて、そろそろ羽衣狐がやられている頃かな・・・俺は戦国が終わるのを待ちながら茶を飲んでいた・・・

氷斬と海賊（後書き）

次回もオリジナル展開です。

勢力も拡大していきます。

氷斬の新しい技を募集中です。 ついでに、オリジナル妖怪も募集中です。

よろしくお願いします。

戦国の終焉・・・雪麗・・・里帰り（前書き）

こんにちは。 武士道です。

週間アクセス数を見たら一万を越えていました。

緊張で更新がし辛いです。

ミスる事もあるかもしれませんが、優しい目で見守ってください。
それでは、始めます！

戦国の終焉・・・雪麗・・・里帰り

「・・・・・・・・それで、佐渡のほうはどうなっている？」

「はっ・・・邪が部下を率いて制圧した模様です・・・それと佐渡の馬泉を仲間にしたようです。近い時期に来る頃かと・・・」

「そうか・・・・・・・・さがっていいぞ。」

「それでは・・・・・・・・」

俺は、キタクの部下の妖怪忍者の話聞いて下がらせた・・・

「それにしても・・・・・・・・金の方は大丈夫かねえ・・・・・・・・あいつの組にはそんなに強い奴はいないからな・・・・・・・・」

俺は茶をすすり・・・・・・・・邪の報告を待つのであった。

「氷斬様・・・・・・・・お？来たか？」はっ・・・・・・・・こちらが佐渡の妖怪の大将の馬泉です。」

「・・・・・・・・」

「何だ・・・・・・・・随分ご機嫌斜めだな・・・」

「それが、氷斬様・・・何だ？」実はこの者・・・喋れないのでございます。」

「へえ・・・・・・・・そうなのか？」・・・・・・・・」

俺が聞くと首を縦に振った・・・・・・・・

「なあ？俺の仲間になつてくれねえか？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうか。よろしくな？馬泉？」

「・・・・・・・・」

そして、俺は馬泉とその場で杯を交わして馬泉に佐渡を任せた・・・

「氷斬様・・・・・・・・ん？何だ？」これで、北陸の方へ集中できますな？」

「そうだな・・・・・・・・なあ邪？」

「何でしょう？」「俺は北陸を手に入れたらそれ以上は進まないつもりだ．．．」それは何故ですか？」

「．．．俺が守るのは北陸までで精一杯だ。それに、あまり領地が増えると目が行き届かないのでな．．．」

「．．．分かりました。氷斬様がそういうなら．．．」
そういつて、邪は自分の領地へ帰っていった．．．

「お頭．．．羽衣狐がぬらりひょんによつて倒された模様です．．．」

「．．．そうか。ご苦労さん下がつてくれ．．．はっ．．．」

俺は部下が出て行くのを確認すると．．．

「．．．．．戦国が終わるな。」

俺はそう呟き酒を口に含んだ．．．俺は、暇だったので山に散歩をしに外に出た．．．

「今日の山は吹雪か．．．あの日を思い出すな．．．」

俺は初めてこの世界に来た事を思い出していた．．．すると、前方から誰かの気配を感じた．．．

「．．．．誰だ？」

俺がそう聞くと．．．意外な人物の声が聞こえてきた．．．

「もしかして．．．氷斬？」

「．．．．まさかな。あいつがいる訳ねえよな．．．」

「聞いてんの？氷斬！？」

「．．．．これは夢。これは夢。これは夢．．．」はあ！」

俺は何故か雪麗にビンタを食らった．．．何故だ？

「何でここにいるんだ？ぬらりひょんの所にいるんじゃないのか？」

「何よ．．．何時でも帰ってきていいって言つてたじゃない．．．」

「確かに言つたが．．．どうした？何かあったのか？」

「・・・・・・・・「まあ喋りたくないならいいが・・・・・・・・ありがとう。」
「とりあえず・・・・・・・・家に来い。歓迎するから・・・・・・・・」
俺は雪麗と一緒に家に向かった。

「へえゝそれであきらめて帰ってきたと・・・・・・・・」
「・・・・・・・・うるさい。」

家に帰って俺が酒を出すと、雪麗が一気に飲み始めた・・・・・・・・俺は少々引き気味に近寄って何があったか聞いてみると・・・・・・・・どうやらぬらりひょんをヨウ姫にとられたそうだ・・・・・・・・それで、ぬらりひょん達に捨て台詞をはいて帰ってきたそうだ・・・・・・・・漫画を読んだ人なら知っていると思うが、あの台詞だ・・・・・・・・『何代かけてもあの人の唇奪ってやる・・・・・・・・』だと俺は思う・・・・・・・・

「ねえ・・・・・・・・「うお！？何だ？」・・・・・・・・キスしてよ」

「はあ？頭でもやられたか・・・・・・・・？」「ベチン！」はい・・・・・・・・すいません」

「・・・・・・・・はい」

雪麗は目をつぶって俺に唇を出してくる・・・・・・・・まずい。こいつ酔っている・・・・・・・・仕方ない金から貰っておいた眠り薬で眠ってもらおう・・・・・・・・俺は雪麗の酒瓶に眠り薬を入れた・・・・・・・・

「それでどうなのよ・・・・・・・・？キスしないの・・・・・・・・？」

そこで、雪麗は眠り薬入りの酒を飲んだ・・・・・・・・イエス！！

「ん？ふああ・・・・・・・・グウ」

すごい効き目だな・・・・・・・・五分もしないうちに眠っちまった・・・・・・・・流石金だな・・・・・・・・どれ、寝床に運ぼうとして雪麗を見ると・・・・・・・・

「まったく、本当に白雪に似てるな・・・・・・・・大人しくしていればかわいいのにな・・・・・・・・」

独り言を呟いて雪麗を寝床に運んだ・・・・・・・・そして、おろそうとした所・・・・・・・・

「うわっ！？」

「うふふゝ氷斬ゝ」

「こいつ・・・寝相悪いな！」

何故か雪麗に抱きつかれた・・・まさかこいつ薬の効果が切れたのか？と雪麗を見ると思いつきり寝ていた・・・俺の気持ちを知らないでこの野郎は・・・と腕に力を加えると・・・あれ？抜けない・・・どうして？

「どつどついうことだ？この袋には確かに・・・げっ！」

袋を見ると（注）と書かれており、内容は副作用で力が強まります・・・（笑）。

「（笑）ってどういう事！？全然笑えない状況なんだけど？」

「うゝん・・・」

「おっ落ち着け！雪麗！っ！早く起きろ！」

だんだん雪麗の顔が近づいてくる・・・やめろおおお！「チユ・・・」

「・・・ごはぁ！」

俺は鼻血を出して気絶した・・・

翌朝・・・最悪の朝・・・炎猿視点

「お頭／＼お頭／＼何処行ったんですか」

「炎猿様！大変です！「どうした！」とっとにかく来てください！」

「何だというのだ・・・」

そうして、炎たちが向かったその部屋には・・・

「おっお頭・・・」

そう・・・鼻血を垂らしながら謎の美女とキスをしている情けない姿の氷斬がいたという・・・そのときの顔は酷すぎて口にはあらわせない・・・

「・・・」

「まあまあお二方・・・あつしは何も見てませんから・・・」

「やめてくれ・・・よけい傷つく・・・」

「・・・」

炎猿から慰められ、泣きそうになる俺・・・雪麗はさつきから何も喋らないし・・・なんなんだよ・・・？一体？炎は二人きりにしたほうがよいと判断したのか、どこかに行ってしまった・・・裏切り者。

「ねえ・・・？「何だ・・・？」「その・・・ごめんなさい。」

「・・・もういいさ。」

「・・・それでね、あの・・・「何だ」わっ私とけっ」

「けっ・・・？「何でもないわよ！」げふう！」

俺は雪麗のビンタを喰らって壁にめり込んだ・・・なんて威力だ。

「・・・」

何も言わずに雪麗はどこかに行ってしまった・・・なんなんだよ・・・あいつ？

俺は部下が置いてくれた茶をすすって落ち着く事にした・・・

戦国の終焉・・・雪麗・・・里帰り（後書き）

次回は雪麗とのデート？っばいことをする予定です。

雪麗、怪我をする（前書き）

どうも、武士道です。

みなさんが読みやすく書ける様に頑張ります。

雪麗、怪我をする

「……………って訳なんだよ。」

俺は炎を呼んで、先程の雪麗の事を話した。

「まったく、何だったんだ？雪麗の奴」

「はあゝそれは、お頭が悪いですぜ？」

「はあ？何で俺が？」

「まったく、お頭は鈍感ですね」

炎はあきれたように、俺に話してきた。

「とりあえずお頭、雪麗を追っかけた方がいいですよ？」

「分かったよ」

俺はそういい残し空緋護に乗って、空から雪麗を探す事にした。

「どうだ？見つかったか？空緋護？」

「うう」

「そうか、お前で見つからないのか・・・それじゃあ、この辺りにはいないようだな」

実はいうと、この空緋護氷斬組では上位に入る探知能力を持っている。

俺達の世界で言う漁船についてるあれ、ソナーだ。

空緋護は、ご存知のとおり巨大な虫の妖怪である。

空緋護は、触覚から電波？のような物を出して獲物を探す妖怪である。

そして、今はその空緋護の能力を使って雪麗を探している所だ・・・

・

「まったく、何処に行ったんだ？あいつ」

俺がそう呟くと空緋護が、近くの森に反応した。

確かあの森は、俺が作った氷の森・・・

ぶっちゃけ、作ったというより修行中に周りの森が凍ってしまっただけなんだが。

「こんな所にいたのか？」

「・・・氷斬。」

俺が、空緋護から降りて森の中に入ると一番大きい樹の所に雪麗がもたれかかっていた。

どうやら、足を怪我をしているようだった。

「どうした？」

「ちよっと、足をくじいちゃって・・・」

と足をさすっている雪麗、不覚ながらも少しかわいいと思ったのは内緒だ。

俺は、何も言わずに雪麗をおんぶした。

「ちよちよっと！？」

「暴れるなよ、運びづらくなる」

「・・・・・・・・・・」

俺が、雪麗をおんぶして空緋護の所に戻ってくると何故か空緋護がいなくなっていた。

俺は、言葉に出来ないほどの怒りを覚えた。

俺は、FFのレベルが上がった時の懐かしい曲を思い出していた。

そして・・・氷斬は怒りが10アップした。

「氷斬？」

「うお！？ なっ何だ？」

「どうしたの？」

「なっなんでもねえよ！ さあ行くか？」

俺は、雪麗に声をかけられ我に返った。

いけねえいけねえ、それより雪麗を家にはこばねえと

俺は、急いで家に向かって歩き出した。

「ねえ？ 氷斬？」

「何だ？ 「ごめなさい・・・」 どうしたんだ？ 急に」

「私が勝手に出て行ったから、こんな事になっちゃって・・・」

「・・・気にすんな。」

「・・・うん。」

俺は、その時雪麗の顔が赤かったのが気になったが知らないふりをした。

まあ、そんなこんなで俺らは家に帰ってきた。

そこで、金から送られてくる薬を見て捻挫の薬を探した。

「おっ あった、あった。これだこれ」

俺が、出したのはよく子供達に使っていた薬だった。

これが、以外に効くのだ雪麗の捻挫程度ならば少し安静していれば治る。

「ほら、足だしな」

「はい・・・」

俺は薬を丁寧にぬった。

それにしても、何で家の連中はいねえんだ？
と俺がそんな事を思っていると

「ちよつと・・・ん？何だ？」・・・その・・・ありがとう

俺はその発言に驚きながらも笑って返した。

「いいってことよ。それより、何か食うか？」

「・・・」

雪麗は俺をじつと見てくる、まるで意外な物を見たかのように・・・

「何だよ？」

「あなたって以外に優しいのね？」

「失礼な奴だな・・・優しくなかったら子供の世話なんてしないだろ？」

「ふふっそれもそうね・・・」

「何で笑うんだよ？」

「どうして白雪さんがあなたの事を好きになったのか分かったからよ」

「????はあ?どういうことだよ?」

俺らはそんな会話をした後、飯を食っていた。

と言つてもただのお茶漬けなんだがな？

ああもちろん雪麗は冷たいお茶だぞ？

俺はあつくても食えるが、雪麗は食えないからな

「あら？このお茶漬け美味しいわね？」

「そりゃどうも」

俺がそっけなく対応して、お茶漬けを食っているとじ〜っと見てくる雪麗がいた。

「さつきから、何だ？ジロジロ見て」

「そっそれは・・・」

急に顔を赤らめる雪麗。すると、雪麗がとんでもない事を提案してきた。

「あのね、氷斬？「ん？」そっその・・・私と・・・」

「私と？」

「けっ結婚しない？」

「はあ・・・？」

俺は、驚いて茶碗を落としてしまった。

そして、俺がふすまを見ると炎達が覗いていた・・・。

特に炎は驚いているようだった・・・何故だ？

一番驚いているのは俺なんだが・・・

雪麗、怪我をする（後書き）

書き方変えてみました。どうでしょうか？

前回の方がよろしい人は感想ください。

次回も楽しみにしてください！

主人公の技を募集中です。

ヨロシク。

北陸制圧！（前書き）

どうも。武士道です。

小説を書いていくたびに緊張で、心臓が破裂しそうです。
では、気を取り直してご覧ください。

北陸制庄！

「氷斬？」

「おお雪麗か？調子はどうだ？」

「ええあなたのおかげで大丈夫よ」

「そうか、そりゃよかった」

俺は朝、雪麗が元気なところを見て安心した後飯を食いにっこうとした所

「ねえ氷斬？「何だ？」昨日の事なんだけれど」

「！！！！」

昨日の事、それはあれか？結婚の話か？

いやいやいやいやそりゃいかなだろ。だって俺バツイチだぜ？奥さんだっていたし

「悪いが、雪麗。それは無「無理じゃないわよ？」お前、心が読めるのか？」

「女のカンよ」

「すごいな・・・」

「どういたしまして」

雪麗はそっけなく反応した後

「それで？結婚してくれるわよね？」

「だから、俺には白雪が「だって、もう死んじやったんでしょ？」

！！！！」

「だから、ね？私とけ「確かに白雪は死んだ」氷斬？」

「俺がここで結婚すると言えば、俺は白雪に顔向けできねえ」

「・・・ふふっ」

「何がおかしいんだ？」

「私の考えたとおりだわ」

「考えたとおり？」

「ええ、でもねそろそろ過去から離れて、現在を見るべきじゃないの？」

「何を・・・」「さあご飯にしましょ？あなた？」

「あなた・・・か。」

そういえば白雪も最初に会った時にあなたって呼んでくれたっけ？

・・・なあ白雪？

俺はこのまま止まっていて良いのだろうか？

雪麗の言つとおり過去を忘れて、現在を生きるべきなのだろうか？

否、俺は過去は忘れない！

でも、俺は今を生きている。覚悟は決まった。

「なあ雪麗？」

「なあに？あなた？」

「分かったよ。「えっ？」結婚してもいいぞって言ったんだ」

「ほっ本当に！？」

「ああ」

「ふふっ！よろしくね？あなた？」

「ああ雪麗」

そうして、食事兼総会

「お頭・・・本気ですかい？」

「本気だが？」

「氷斬様！それはなりませんぞ！」

「何故だ？邪」

「それは！」「ふん！」「ぐはあ！」

邪が喋ろうとした瞬間、炎が邪の頭を殴りつけた。

「何してんだ？」

「なっ何でもねえですよ」

「そうか？それじゃあ、北陸の方はどうなっている？」

「はあそれなら能登と加賀は金黄雀と邪が落とした模様です。」

「そうか！それで、その大將は？」

「残念ながら能登の大將は戦いで死んでしまったようです。」

「そうか、残念だ。新しい幹部を作らなければならねえな」

「はい。残った勢力は後は越前の麻露党だけです。」

「そうか。それで、加賀の大將だった妖怪は？」

「今、こちらに向かってきているようです」

「分かった。さて、越前には俺が行くでしょう」

「お頭が直々に？」

「ああこの麻露という妖怪面白そうだからな」

「そうですか……」

翌日……

俺は、茶を飲みながらある考え事をしていた。

原作開始までにこのくらい勢力を上げとけば大丈夫だろ……

これで、奥州も安泰の筈。あつ蝦夷支配すんの忘れてたわ
まあそれは後でやるか、今は越前だな

「炎、お前らはゆっくり休んでな。俺独りで行くからよ？」

「分かりました。ご武運を」「お気をつけて」

「おう！っていうか、出発は明日だぞ？」

俺がツッコミをかますと、炎たちは笑ってごまかした。
「つか邪何時回復した・・・？」

俺は、明日に向けての準備をした。

北陸制圧！（後書き）

次回は戦闘入ります。

ちよつと、説明が足りなくてすみません

組ごとの役割分担講座（前書き）

どうも武士道です。

更新遅れてすいません。

これからよろしく。

組ごとの役割分担講座

「ねえねえ氷さん？」

「ん？何だ？」

俺が、茶の間でくつろいでいると銀紗が話しかけてきた。

「どうした？みんなと遊んでるんじゃないのか？」

「大丈夫。みんな昼寝してるから」

「そうか？で、何か聞きたいことがあるんじゃないのか？」

「うん！実は組の事について教えてもらおうと思って」

「組の事？「うん」してどうするんだ？」

「私、世話されてばかりだったから恩返しをしたいの……」

にこりと笑って俺を見てくる銀紗・・・可愛くなったな。

父ちゃんは嬉しい。

子供は成長するのが早いというが、本当だなあ

「氷さん！聞いている？」

「ん？ああ！聞いてたよ。分かった、そこまで言うなら教えてあげよう」

「うん」

説明

「いいか？氷斬組は基本5つの役割分担がされている」

「役割？」

「そう、戦闘班、諜報班、医療班、伝達班、商業班だ」

「???」

「ははっ！まあ分からんわな。どれ、これを見てもろ」

俺は棚から組織図を出した

総元占め：氷斬組

戦闘班：邪鬼組、玄鬼組、雷鳥組、鎌鼬組、赤河童党

諜報班：鎌鼬組、雷鳥組

医療班：金黃雀組、蒼組

伝達班：大百足組、馬泉組

商業班：蒼組、赤河童党、奥州遠野一家

???：波河鬼組

「この名前が重なってるのは・・・?」

「ああこれは、複数の仕事をやってるんだよ」

「へえじゃあこの???は?」

「うゝん、こいつは今のところ保留かな」

「む」

何故か銀紗は納得していないようだ

「しかし、この組は一番忙しくなりそうだぞ?」

「本当!?」

「ああ本当だ・・・それにしても銀紗、何故波河鬼にこだわる?」

「この人、私にとっても優しくしてくれたお兄さんでしょ？」
「ああそうだが・・・」

波河鬼、帰ってきたらお灸をすえてやらんな・・・家の愛娘によ
くも・・・

「氷さんく？」

「ん？何だ？」

「この班って何の仕事をしてるの？」

「それはだなくよつと」

俺はまたまた棚から、班の役割を書いてる巻物を出した。

戦闘班：戦闘を主体とする班

諜報班：敵の情報や地形の情報を調べる班

医療班：お医者さん

伝達班：諜報班の情報や食い物や人を運んだりする班

商業班：組の金銭収入や食い物を探したり、作る班

「何か、医療班だけ酷いね・・・」

「スマン・・・ちよつと面倒くさかったから・・・」

「はあくでも、大体分かった。これなら氷さんたちの役に立てる！」

「期待してるよ？」

「うん！」

俺はそうして銀紗の頭を撫でて

「ふわあ〜」

「さあお前もみんなのところで眠って来い」

「うん〜分かった」

先に言っておくが、俺はロリコンではない。

しかし、娘ですよ？自分の娘を可愛がらない親はいないでしょ？
ということと銀紗を寢床に送って俺は茶の間に戻った。

そして、俺は今茶を飲んでいる。

「ずず〜ふう・・・平和だなあ〜」

俺は、万年雪が積もっている山を見ながら再びくつろいだ。

組ごとの役割分担講座（後書き）

次回は幹部紹介です。

幹部紹介（前書き）

みなさん、こんにちわ。 武士道です。

幹部の詳しい説明を行いたいと思います。

幹部紹介

幹部は総勢12名

炎猿 名前の通り猿の妖怪。炎を出して闘います、シンプルですいません。

邪鬼 禍々しい気を放っている鬼、主食は鹿の肉。畏れは人を操る事です。

戦闘をあまり好まない性格

玄鬼 邪鬼の弟、見た目は怖いが実は優しい。童話の赤鬼のような存在。畏れは体を硬くしての突進。

キタク 実は原作のイタクの父親？の設定。無口で任務を忠実にこなす忍者の鏡。畏れはイタクと同じです。

蒼 水を操る妖怪。あまり戦闘向きではないので傷を癒す能力を使って看護をしている。

性格は面白い事好き、やんちゃ。

金黄雀 雀の妖怪、原作で言うゼンのポジションです。畏れは病気をうつすこと。

赤河童 ご存知の通り原作のあいつです。畏れは未定です。

大百足 原作のような奴ではなく巨大な百足そのもの。動きが以上に早い、実は組の中で最速です。畏れは目にも留まらぬ速さでの攻撃。毒ももってます。

馬泉 馬の妖怪、話す事が出来ない。組の中でナンバー2の速さの持ち主。畏れは幻覚を見せながらの攻撃。

雷鳥 天狗。雷を操る妖怪、少々短気。組の中でも強さは五本指に入る実力。畏れは名前の通り雷を操ったりしながら戦います。

波河鬼 死んだ侍の妖怪、ぶっちゃけ戦国バサラの元親である。性格も武器も……

畏れは波を出しての波状攻撃 これでも五本指の一人

白雪 雪女です。ただの雪女にしては割と妖気が強いほうで、東北最強の雪女だった。

そのせいか、東北の雪女からは尊敬の目で見られていた。畏れは氷です。

実は五本指の中でも最強だった。

幹部紹介（後書き）

次回から再びスタートします。
白雪をやっと登場させそうです。

神もどき・麻露 前編（前書き）

武士道です。

更新がおそくてすみません。

神もどき：麻露 前編

「「お頭！行つてらっしゃいませ！」「」
「ああ行つてくるよ」

大勢の部下に見送られ俺は家を後にした。

そして、周りの景色を楽しみながら港へと向かった。

何故かつて？実は波河鬼を能登の妖怪の大将にするつもりなんだ。

それで能登に行くついでに波河鬼の船で送ってもらふ事にしたんだ。

「お頭あ待つてたぜ！」

「波河鬼すまないな。無理言つて」

「なあに大将の頼みだ。断るわけにはいかねえよ」

「ありがとな」

そして俺は波河鬼の船に乗って出羽を後にし、加賀へと向かった。

まあ波河鬼の部下が以上に増えていたのにはビックリしたが……

ザザン

「到着だぜ？お頭」

「ありがとよ波河鬼。お前はこれから能登の妖怪を指揮してくれ」

「分かった、お頭は？」

「俺はここから越前へと向かつて麻露つて妖怪を仲間にしなきゃならねえ」

「麻露……」

麻露という名前を聞いて波河鬼が何か渋い顔をした。

「どうした？」

「実は・・・・・・・・」

「それにしてもなあ」

俺は今越前へと向かう道を歩いている。

今考えたら空緋護を使えば良かったのでは？と考えたら悲しくなってきたのでやめた。

この道を通り越えれば越前である。

時刻は夕方であった。

「まさか麻露がこんなにも有名だったとは・・・」

麻露・・・波河鬼の話では波河鬼と同じ生まれらしい。

つまり戦国の武士だったという事、ちがうのはこれからである。

麻露は生前は誇り高く剣術の才能の塊のような武士だったようである。そして、誇り高い死を遂げた。

波河鬼の話ではここまで・・・俺が疑問に思ったのはこの辺りの村人の話であった。

麻露は刃物を持っている者を見つけては片っ端から戦いを挑むようなのである。

俺が腑に落ちないのはそんな武士の手本のような奴が、何故そんな事をしているのかという事。

だから、ここら辺の村人は刃物は絶対に持って越前に入らないという。

「まあ会って確かめたほうが早いかな・・・」

俺は頭をかきながら越前へと向かった。

翌日

「はあゝここ何処だよ」

ただいま氷斬絶賛迷子中……

あれから越前にはついたのだが、妖怪なら山だろうという俺の勝手な憶測で入った所……

ものの五分で道に迷いました。

俺が一人で愚痴りながら歩いていると、薪を拾っている若い男性が居た。

「あのゝすいません」

「何だ？」

「どうしたらこの山から抜けれるでしょうか？」

「……ついて来い」

俺は心優しい青年についていくと、本当に山を抜けれた。

「ありがとう！お前のお陰で助かったよ」

「どうって事はない」

無愛想な奴だな……

しかし、こいつさつきから俺の刀をガン見なんですけど……
こいつ絶対麻露だろ？

「どうした？この刀が気になるのか？」

「この刀・・・いい刀だな」

「へえいい観察眼だな」

「ところでここに何のようだ？」

「ああそうだ、お前麻露って妖怪知ってるか？」

俺がワザと聞いてみると、男は少し笑って

「いいだろう、俺の家に来い。詳しく話してやる」

「おおありがとよ」

俺は麻露の家へと向かった。

「それで何で麻露の事を聞いてどうするんだ？」

「ん？ただ会いたいただけさ、どんな奴かなあって」

「ふっ・・・面白い奴だ」

俺達は囲炉裏を囲むようにして座っていた。

麻露？は自分の刀を横に置いていた。

「お前は武士なのか？」

「いや・・・」

「じゃあ何で刀を？」

「護身用だよ・・・」

麻露？は刀を見て悲しそうな顔をしながら話していた。

「そうか・・・麻露が何処に居るか知らないか？」

「知らん」

「残念だなあ会って仲間にしたかったのに――」

俺が話している途中に鋭い剣閃が俺に向かって来た。
俺はそれを不月で弾いた。

「!!!!ほう……」

「居合いか……結構早いな」

「俺の居合いを弾くとは、只者ではないとは分かっただけだが……
何者だ？」

「そういえば自己紹介がまだだったな？俺は氷斬」

「……出羽の氷鬼が俺に何のようだ？」

こいつ……強いな。

流石は有名な武士だった事はある。

「俺の仲間にならないか？」

「結局、あいつらと同じか」

「あいつら？」

「何でもない」

麻露は俺に向かって突っ込んできた。

俺はとりあえず麻露を迎え撃つ事にした。

神もどき：麻露 前編（後書き）

次回で麻露完結する予定です。

神もどき・麻露 後編（前書き）

武士道です。

更新遅れてすいません。

神もどき：麻露 後編

「むん!!」

「よつと……」

こいつ……剣術だけなら俺より上だな。

俺は麻露の居合いを避けながら反撃の隙をうかがっていた。
ぶつちやけ、俺の畏を使えば簡単に倒せるのだが……

「居合い——霧雨!!」

「ふん!!」

俺の霧雨を麻露はどうという事はなく同じ居合いで弾いた。

「貴様……何故畏を使わない？」

「なあに、あんたと純粹に剣術だけで勝負したいと思ってな」

「ふつ……面白い奴だ」

こいつの剣術は家の組の連中では適わない程の腕だ。

実際、俺が押されてきている。

「どうした？もう、逃げ場は無いぞ？」

「参ったな……本当にあんた強いな」

「出羽の氷鬼がこの程度とは……氷斬組の底が知れるな。それで
は、死ね!!」

麻露の凶刃が俺に向かって飛んでくる、しかし俺は麻露の刀を畏を
使って凍らせた。

「！！ なっ！？」

「すまないな・・・ 畏を今まで使わなくて。 お詫びといっちゃあ何だが、これでも喰らえや？」

「ぐあああああああ！！」

俺は刀を使わず、畏を纏った拳で思い切り殴った。

麻露は壁を突き破って外まで飛んで行った。

俺はすぐに後を追った。

「はあ、はあ、まさか素手で来るとは予想外だったぞ」

「そりゃ悪い事したな、だが、まだまだ行くぞ！！」

俺は居合いの体制をとって麻露に仕掛けたが、横からいきなり斬撃が飛んできたので後ろに下がった。

「何だこれは・・・？」

よく見ると、麻露の周りが歪んで見えた。

麻露はゆっくり起き上がると、笑いながら言った。

「お前も畏を見せたんだ、俺も見せなきゃ不公平だろう？」

「成る程、これがお前の畏か？」

「その通りだ、俺の畏はありえない方向からの斬撃。 それでは行くぞ！！」

「くっ！！？」

俺は麻露から少し距離を置き、刀を構えて対峙した。

それにしても、ありえない方向からの斬撃とは・・・ 恐ろしい畏だな

「そら、どうした?」

「ならこれならどうだ?

ひさいりゅう
氷砕竜!」

「む!?この程度!」

俺の氷砕竜を麻露はものともせず切り刻んだ。
どうする?あれを使うか?

いや、あれは危険すぎる……

「これで終わりだ!」

「くっそ……」

真正面から来る斬撃を俺が居合いでかわすが、突如現れた後ろからの斬撃に斬られた……
かのようにみえた。

「なっ!?これは、氷で作った偽者!」

「ふゝ何とか騙せて良かった」

俺は麻露の後ろで呟いた。

それにしても危なかった、もう少し斬撃が来るのが早かったら斬られてたな

「さて……決着だぜ?」

「くっ!」

「遅いぜ? 居合い——氷雨!」

「ぐっはあ!」

麻露は俺の居合いを受けて倒れた。

俺は麻露の刀傷を凍らせて止血した。

「見事だ……流石は出羽の氷鬼」

「いやいや、剣術だけならお前の方が強いよ。それで話があるんだが……」

「何だ？」

「どうだ？俺の仲間にならないか？」

「……いいだろう。お前なら俺の新しい主君にふさわしいかもしれない」

「よし！！決定だな？」

よし！！越前を麻露に任せておけば、すぐに統一するだろう。
しかもこいつ、結構強いしな

「しかし氷斬……」

「ん？何だ？」

「1つ問題がある……」

「は？問題って」

「はっはっ！！俺が麻露だ！！行け！！野郎共！！」

「「「おう！！お頭！！」」」

成る程ね、こいつらの事ね……

巷の麻露事件の犯人はこいつか……どうも怪しいとは思ってたんだよね

「こいつらを倒せばいいのか？」

「ああ頼む」

「任せとけ」

俺はメタボった麻露ハ偽者」の前に立った。

「ああん？貴様、俺が誰だか分かってんのか？」

「いや知らないね」

「何だとお！！これでも喰らいやがれえ！！」

「「「でたあ！！お頭の人斬り包丁！！」」」

ただデカイ包丁を俺は難なく凍らせた。

「なあっ！！？」

「おい……デブ妖怪」

「はい！」

「これ以上麻露の名を汚すのなら」

俺はデブ妖怪の横に氷の槍を作り、近くの岩を破壊した。

「殺すぞ？」

「ひいひいひいひいひい！！スイマセンでしたああああ！！」

「 ？ ？ ？ ？ ？ 」

ダッシュで逃げていく頭を訳も分からず見ている部下、約40名
 まあそりやそうだよな……

「おい、おまえら!!」

「は、はい！」

「本物の麻露はこいつだ！お前らが麻露の部下ならこいつの部下
って事になる。どうだ？こいつに着いて行くか？」

└─┘
└─┘
└─┘
└─┘
•
•
•
•
•
•
└─┘
└─┘
└─┘
└─┘

約40名の妖怪は麻露を少し見ながら、相談していた。

「『お頭！！よろしく頼みます！！』」

「おい・・・氷斬。これはどういうことだ？」

「どうって、お前はこれから越前を統一してもらうんだから部下は欲しいだろ？」

「それは・・・そうだが」

「ならいいじゃねえか」

「ううむ・・・」

麻露はどうやら迷っているようだ・・・

何か嫌な事でもあるのか？

「どうした？」

「俺には部下を率いる能力は・・・」

「何だよ・・・そんな事か？」

「何だと？」

「ぶっちゃけて言うぜ？人を指揮する能力なんざ、経験だ。」

お前もこれから経験して上手になればいいだろう？俺も昔は上手くはいかなかったしな？」

「ふっ・・・そうだな。俺なりにやってみるよ」

気のせいだろうか？出会った時より明るそうにみえたのは・・・

「頼んだぜ？麻露？」

「任せておけ・・・」

俺は越前を麻露に任せ、出羽に帰ることにした。

神もどき：麻露 後編（後書き）

次回は白雪復活予定です

お前何で生きてんだ！？（前書き）

武士道です。

久々の更新です。

こうして欲しい、こういう感じで進めて欲しいという意見がありましたらお書きください。

お前何で生きてんだ!?

俺が出羽に帰って、早一ヶ月・・・早速麻露のからの使者が報告にきた。

「それで・・・どうだった?」

「はい、お頭もとい麻露様は見事越前を統一、今度出羽に杯をくみに来ると申しております」

「そうか!! 意外と早かったな・・・見込み以上だったって事か?」

俺が自分の人を見る目に感心していると、炎が話しかけてきた。

「お頭、これで奥州、北陸は制圧しましたね」

「ああ、これからは地盤の強化に努めるようにしないとな」

炎は俺が話している間、何も言わずに俺を見ていた。
俺は少し気持ち悪!!と思ったので話した。

「何だよ・・・? 俺の顔に何かついてんのか?」

「いえ・・・」

こいつ・・・何を隠している?

よし、聞いてみよう・・・

「おい炎・・・」

「はい」

「何か俺に隠し事は無いか?」

「い、いえ!! 何にもありません!!」

バレバレじゃねえか！？と突っ込みたがったが、あえて冷静に聞いてみた。

「話せ」

「じ、実は――」

俺と炎は雪山にある、俺の別荘を眺めていた。

「おい、確かあそこは結界が張られているんじゃないのか？」

「いえ、張られておりません。そんな事より、早く行きましょう」

「お、おう」

心なしか炎はメチャクチャ喜んで居るように見えた。

俺たちが別荘に着くと、炎はすぐさま別荘の扉を開けて中に入った。

「おい炎、ここに何の秘密が――」

「白雪、お頭を連れてきたぞ・・・」

「・・・はっ？」

今、炎は何と言った・・・？

白雪だと？ あいつはあの時、死んだ筈だろ・・・？

すると、襖が開かれそこに居たのは俺がよく知っている人物だった。

「久しぶりね？氷斬？」

「し、白雪……？」

「ふふふ……」

白雪は俺の驚いている顔を見て笑っていた。

白雪はそのまま座り、何かを作り始めた。

俺は動揺しながらも、白雪の向かい側に座った。

「お前、死んでハズじゃ……？」

「あの時ね……金の治療は成功していたのよ？」

「え……？」

俺は普通の返答に変な声を出してしまった。

すると、白雪が俺の前にお茶漬けを出してきた。

「まあ、これでも食って落ち着きなさいよ？」

「あ、ああ……」

「ふふふ……」

俺がお茶漬けを食っていると、白雪は笑いながら俺に言った。

「懐かしいわね……こうして話してたのは」

「そうだな……」

俺がそういうと、白雪が俺に抱き着いてきた。

「どうした？」

「会いたかった……」

「……俺もだよ」

俺が白雪をそう言って抱き返すと、炎がゴホンと咳払いをした。
俺らは顔を赤らめながら抱いていた手を離れた。

「お二人とも、それでは本家に帰る準備を」

「そうだな！！ よし！！ そうしよう！！」

「ふふっ、そうね・・・」

その後、俺ら二人と炎は本家に帰った。

「ちょっと、氷斬？」

「な、何だ？」

「あれは一体どう言う事かしら？」

俺が白雪が指差している方向を見ると、雪羅が俺の布団で寝ていた。
どうやら、白雪は炎から無理矢理、俺と雪羅の関係を聞いたらしい。
俺は冷や汗をかきながら誤魔化した。

「友達です。」

「嘘でしょ？」

「はい・・・」

その後、俺は白雪にこっそり絞られた。

その後、目を覚ました雪羅も白雪の生存に驚きながらも俺と同じように絞られた。

雪羅と白雪ときどき俺（前書き）

武士道です。

更新速度を速めて欲しいと意見がありました・・・遅くて本当にすいません。

さて、その事ですが更新は出来れば四日に一回、多くて二回はこれからやる予定です。それでは、これからも応援よろしくお願いします。

雪羅と白雪ときどき俺

「それで……一体どういう事かしら？」

「……………」

現在、俺と雪羅は白雪にめっちゃ怒られている。

すると、雪羅が急に小声で話しかけてきた。

「ちょっと、氷斬。どうして、白雪さんが生きてるのよ!？」

「いや、実はあの時本当は金の治療が成功してたらしんだ……」

「何であんたはそれを知らないのよ!？」

「いや、白雪が俺を成長させるためだとかいっただらしくてな……」

俺らがそう話していると、白雪がすごい形相で話に割り込んできた。

「ちょっと!! 二人とも聞いているの!？」

「は、はい!!」

「そもそも、氷斬!! あなたって人は——」

その時、襖からその様子を見ている奴らがいた。

氷斬組の幹部、炎猿と邪鬼である。

「……本気で怒っておりますな。白雪殿は……」

「当たり前だろ……だから、雪羅とお頭をくつつけるなど言っ
といたのに……」

「申し訳ない……」

二人が喋っていると、奥から一人の男が炎達のところにやってきた。
最近、氷斬組の幹部になった、麻露である。

「おい、氷斬はいるか・・・？」

「お前は確か・・・お頭が言っていた、麻露殿か？」

「いかにも。約束の杯を組に来た次第」

「ああ・・・今はやめとけ」

「??? 何故？」

炎達がチヨイチヨイと指差す方向を麻露が見ると、そこには一人の女から説教を受けている氷斬の姿があった。

「・・・そのようだ」

「だろ？ よし、まずは俺達で酒を飲もうぜ？」

「私も、それには賛成ですな」

「そうするか」

三人組はお互い顔を見合わせて笑うと、早速居間へと急いだ・・・

「うう・・・酷い目にあった」

俺達が解放されたのは夜の三時、今時計を見ると朝の七時であった。白雪は一応、俺達が結婚していたと知って驚いてきたが・・・何と、『私が最初に結婚したんだからね!??』と言い残すと、部屋を出て行ってしまった。

雪羅は説教が終わると、『白雪さんには、負けない・・・』といって自分の部屋に行ってしまった。

「あゝあゝ、面倒な事になっちまったなあ……」

いや、二人とも可愛い事は可愛いんだけどな……
しかしなあ、二人と結婚しているってのは不味いんじゃないか？
いや待てよ、そういえば昔の日本では側室なる物が存在してたんじゃないかったっけ？

確か、正室が本当の奥さんで、側室は……

「側室は……何だっけ？」

俺が頭を掻いていると、いきなり俺の部屋の襖が開いた。
いつもなら、炎が起こしに来るのだが……何故か今日は、白雪と雪羅である。

「あなた、朝よ？起きてる？」

「……」

こいつらは一体何をやっているんだろう……？
前掛けをしつかり着て、奥さんらしくしているし、言葉遣いもなんか怖い。

しかも、どっちも同じ台詞をはいてるし……

「あのなあ……朝は炎が起こすハズだろ？炎はどうした？」

「あら、炎？　確か、嫌な予感がするから今日のお頭の朝は頼みますとか言ってたわよ？」

ねえ？雪羅？」

「そうですね。確かにそう言っていました。今頃、居間でお茶でも飲んでるんじゃないですか？」

フフフと笑っている二人を見ながら俺は思った。

炎は仕事はとても熱心で、そんな嫌な予感がするから頼むとか言う奴ではない。

という事は……やられたか？

「おい、二人とも炎は一体何処に――」

「えっ？もう一回言っただな」

「……何でもありません」

俺が二人が立っている隙間から見たのは氷漬けの炎。
ああ……やっぱりね。

「さあ、朝ごはん出来たわよ？あなた」

「私も出来たわ」

「お、おう」

今日の俺の朝飯はとても量が多かった。
普段はお茶漬け一杯程度ですますのだが、今日は朝から何故か鍋である。

「な、なあ？お前ら」

「何？あなた」

「ど、どうしたんだ？今日のお前ら何かおかしいぞ？」

俺がそう言つと二人はショックを受けたような顔で言った。

「そんな……朝から熱い想いをして、作つたのに……」

「私達が愛情込めて作ったのに・・・」

「分かった、分かった！！食うよ！！食べばいいんだろ！？」

「ふふふ」

実際、美味かった・・・

しかし、熱い想いをして作った割りにはメチャクチャ冷たいのだが・
・・

だが、俺が飯を食べているのを見る二人の笑顔を見てツツコミが入
れられない俺だった。

珍客・・・？
(前書き)

武士道です。
更新頑張ります。

珍客・・・？

白雪と雪羅のツツコミ所満載の鍋を食った次の日、俺こと氷斬は眠い目を擦りながら外へ出て思い切り欠伸をしていた・・・

「ふぁゝあ・・・眠いなチキショウ」

俺がそう言いながら眠気覚ましに腕を上に向けて伸びていると玄関から音がした。

「あなたゝ？朝ごはんよ」

「白雪？分かった、今行くよ」

「それと・・・」

「ん？どうした？」

「お客さん・・・」

「・・・客？」

客・・・？

確かに家は客はたまに来る、俺がお世話になってる大名家の人物やら、たまに子供達と行く城下町の駄菓子屋、定食屋のおっちゃん、おばちゃんとか・・・

しかし、こんな時間帯に来る客なんていたかなあ？

もしかしたら、大名家の緊急の依頼かもしれないねえ、さっさと行くか俺は急いで客の待つ居間へと行く事にした。

「よう、氷斬！久しぶりじゃのう？」

「もしかして……客ってお前か？」

「その通りじゃ」

何故か居間にはぬらりひょんが居た、しかもごく丁寧に飯まで食つてやがる……

俺が確認のために白雪を見ると白雪は首を縦に振った。

•
•
•
•
•

「どうした？氷斬？」

何だよ！！大名家からの使者だと思つてあせつたじゃねえか！！
と言いたいがここは落ち着いて対処する事にした。

「それで……この出羽くんたりまで赴いて何のようだ？」

「それはのう……モグモグ——」
 おお氷斬、お主の

「嫁さんの料理は美味しいのー！嫁さんの名は何と言うんじや？」

「ああ、白雪の事か？」

「どねどね・・・」

ぬらりひよんはそう言いながら白雪をじつくりと見始めた．．．
そして、いきなり俺の横に来てささやいた。

「いい女じゃのう・・・お主、どこであんなべっぴんさんを見つけたんじゃ？」

「何処でもいいだろうが・・・それより、何しに出羽まで来たんだ？それほどの理由があつてきたんだろうな？」

「ちえゝ連れない奴じゃのう……まあいいじゃろう」

ぬらりひよんは手に持っていた箸を置き、真剣な顔で話し始めた。

「頼む！！ワシと勝負してくれんか！？」

「はぁ・・・？」

いきなりの決闘発言に俺は目を丸くした。

え？何？ この人、いきなり何言っちゃってんの？

「頼む！！この通りじゃ！！」

「ええと・・・どうしたんだ？いきなり、決闘だ何て・・・」

「思えば・・・わしとお主が始めて戦ったときはお互い本気じゃなかったじゃろう？ワシはお主と本気で戦ってみたいんじゃない？頼む！！」

「しかし・・・」

俺が迷っていると、白雪が俺の肩に手を置いてきて話しかけてきた。

「あなた・・・闘ってあげたら？」

「しかし・・・子供たちに迷惑がかかる」

「大丈夫よ・・・ほら、あそこでやればいいんじゃない？」

「あそこ？」

「あなたが作った氷の森よ」

「あぁ・・・あそこか」

確かにあそこなら人目に気にせずによれるし、俺の力をフルで使っても被害は少なそうだ・・・

「よし、分かった。やろう」

「本当か！？」

「あぁ、着いて来い」

俺はぬらりひょんと共に外へ出た。

そして、俺が口笛を吹くと上空から空緋護がやってきた。

「おお何じゃ！？あれは！？」

「あれは、俺の相棒の空緋護と言う妖怪だ。あいつに乗って決闘の場所へ行くぞ」

「分かった」

そうして、俺達は空緋護へ乗って俺が作った氷の森へと向かった。

「お頭・・・大丈夫だろうか？」

「大丈夫よ、炎。あの人がやられるわけ無いじゃない、それに私が心配してるのはぬらりひょんの方よ・・・」

「確かに・・・まあお頭の事だから手加減はすると思うが・・・」

「

「さっ、私達は朝御飯の片づけをしなきゃね。それと、子供達の世話かしら・・・」

「そうだな」

白雪は氷斬を心配する事も無く、普段通りに生活していた。

鏡花水月VS氷斬（前書き）

武士道です。

次の更新はすこし遅くなると思います。

鏡花水月VS氷斬

——ヒュオオオオオオと出羽の雪山の強烈な冷たい風が氷の森を包んでいた。

人間なら絶対に入れない、そこらへんの雑魚妖怪もこの時期では近づく事もできない。

しかし、氷の森の中は強烈な冷たい風も俺が作ってしまった氷によって防がれている。

そんな所に俺達は着いた。

「おおーこれが、お主が作ったという氷の森かのう？」

「作ったっていうか・・・勝手に出来ちまったんだけどな」

ぬらりひょんは氷の森の氷を珍しい物を見るように見ていた。そして、振り向くと真剣な顔で言った。

「それじゃあ——始めるかのう？」

「そだな、さつさと終わらそうぜ？」

互いに腰にある刀を抜く、そして氷の森の一部の氷が落ちた瞬間・
・互いに走った。

最初はお互いに剣術で闘っていた、俺が牙突をしてぬらりひょんがそれを刀で受け流したり、

ぬらりひょんの刀を俺が受けたりなどだ。

しばらく、打ち合っているとぬらりひょんが俺から距離をとった・

「氷斬、わしの修行の成果を見せてやる！」

「やってみな・・・」

「さて・・・わしが見えるかのう？」

「！！！！」

その瞬間、俺の視界からぬらりひよんが消えた・・・

確かこれは・・・ぬらりひよんの畏！？

目の前を見るとヒタヒタと歩いてくる音が聞こえる・・・

たしかに、ただの妖怪ならばその闘い方でも通じるだろうが・・・

俺には効かねえぞ！！

俺は全身から妖気を解放し、周りに冷気を当てた。

「くっ！？」

「甘いぞ！！ぬらりひよん！！」

俺は姿を現したぬらりひよんに向かって、牙突で突撃した。

俺の牙突がぬらりひよんの体を貫いたと思ったその時、ぬらりひよんの体が陽炎のように消えた。

「何！？」

「ふふふ、どうじゃ？氷斬！！」

「やるじゃねえか・・・それが、お前の本当に力かい？」

「そうじゃ・・・これが、わしの真の力・・・鏡花水月じゃ！！」

俺は視界に写るぬらりひよんを斬っていくが、全部陽炎のように消えてしまった。

「成る程・・・水に浮かぶ月を斬ってる気分だぜ」

「そうじゃろう？」

「確かにそこらへんの妖怪ならつつじるが、俺には無意味だぞ？ぬ

らりひょん」

「なんじゃと？」

俺は妖気を開放し、畏を発動させた……

俺の畏は御存知の通り、氷の力である。

しかし、俺の撥は全方位の氷の波動を与えること……お前に逃げ場は無い！！

「撥……絶対凍土」

「ぬお！？何じゃ何じゃ！？」

「悪いなぬらりひょん、お前の負けだ……」

「どうやら、そうらしいのう……」

ぬらりひょんの周りには氷で作られた、壁があつた。これでは、鏡花水月のしようもない。

「え？このまま、帰るのか？」

「ああ、組の事もあるしのう」

「そうか……少し、名残惜しいな」

「なあに、また来るからのう。今度はお土産も持つてのう」

「くくく……楽しみにしとくよ」

「お主も今度は家にこい。歓迎してやるわい」

「ああ……暇だったらな」

そうして、ぬらりひょんはそのまま歩いて行ってしまった。
……大丈夫であろうか？

「ただいま」

「あら？あなたお帰りなさい」

「おお白雪。昼飯頼めるか？」

「はいはい、もう出来てるわよ」

「ありがとな」

「いいのよ・・・夫婦じゃない」

「・・・そうだな」

今日も氷斬組は平和である・・・

時代が動く時
(前書き)

武士道です。

更新頑張ります。

時代が動く時

戦国・・・安土桃山・・・そして、この江戸時代となった。

時代、いや時間は何時も動いている。俺がこうお茶を飲んでいる間もずっと・・・だ。

「はあ、時が動くのは早いな・・・もう、江戸時代とは」

あの日、闘った羽衣狐が懐かしくなる・・・そういえば、土蜘蛛はどうしているのだろう？

ああ、晴明に封印されてるんだっけ。どうすっかな、原作介入しちやおっかな

「あなた？何をしているの？」

「お？白雪か。いや、今までの事を振り返ってたんだよ」

「ふふ・・・もう、お爺さんみたいなことしないでよ」

「いや、実際俺爺さんじゃね？俺の年齢を考えれば・・・」

「細かい事言わないの。それに、あなた私と出会った頃と容姿が全然変わってないじゃない」

「む？そうか？」

「ふふ、そうよ。まあ、私も雪羅もだけどね」

そういえば確かに、他の奴と比べると俺の見た目はそんなに変わってないような気がする。

俺達、雪の眷属ってのは老いはないのだろうか？

雪の眷属？ ああ、これは俺達氷の力を使う妖怪の事だ。

雪女や雪男、雪ん子なんてのがいい例だと思う。

何故か、奥州以外の妖怪共は俺の事を雪の眷属の始祖だとかほざく奴がいるが違うからね？

「そういえば、雪羅はどうした？」

「ああ、あの子なら台所にいるわよ？」

「ん？さつき、朝飯を食ったばかりじゃなかったか？」

「ええ、でもあなたに食ってもらいたい物があるんですって」

「へえ、そりゃ楽しみだな」

その後、白雪と子供達についての話をして炎猿と将棋をさす事にした。

最初は炎が押していたが、俺の会心の一手によって炎は心が砕けて逃げた。

「まったく、これで俺の121勝51敗だな。」

「ちよつと・・・氷斬。」

「ん？雪羅か？どうだ、出来たのか？」

「え、ええ・・・／＼／」

雪羅は頬を赤く染めながら、返事を返した。

まったく・・・可愛いやつめ。さて、食いに行くとしますか！雪羅の手料理を！

「・・・雪羅」

「な、何？」

「一応聞いておくが・・・今の季節は？」

俺は轟々と振っている吹雪を見ながら言った。

手料理？　おいおい、これは手料理なんかじゃ決して無いと思うぞ？
・・・だって、何時もの俺の茶碗に氷がすり潰して置かれているだけなんだもの。

「冬ね、しかも一番酷い時期の」

こ、こいつ普通に返事を返しやがった！？　た、只者じゃねえぞ！
こいつはああ！！

「・・・一応言っておくぜ？これ、カキ氷じゃね？今冬じゃね？」

「う、うるさいわね！！　いいから食いなさいよ！！」

「はいはい・・・」

まあ、一応氷の妖怪なんでヘツチャラだけどね。

そう思いつつ、カキ氷を口の中へ運ぶと口の中に電撃が走ったような味が広がった。

「こ、これは！？」

「ど、どう？」

「な、何故だ・・・？何で、カキ氷がこんなに美味いんだ！？」

「そうでしょう！？」

マジで美味かった・・・氷が口の中で溶ける瞬間、何故か甘味が出てきたのだ。

これはいい・・・夏とか最高じゃね？俺達、雪の眷属は夏が天敵だしな。

「雪羅・・・この氷は一体何処で？」

「え」と、確か私の故郷の山から獲れる氷で作ったのよ。故郷の奴

らから送られてきてね、あなたがこの前、カキ氷の事を話していたのを思い出して作ってみたのよ。それで、食べてみたらビックリしちゃって」

「成る程ね・・・」

「氷斬様!!」

「ん? どうした?」

「早急にお耳にしたい事が!!」

「分かった、すぐに行く」

俺は雪羅と一緒に総会の場所へと向かった。

「何? ぬらりひょんに息子が?」

「はい。それに江戸では本来の妖怪ではない奴らが奴良組のシマを荒らしているようです」

「そうか」

俺はすぐ傍にあった茶を一口飲んだ。

さて、どうするか・・・さっき、話しにあった本来の妖怪ではない奴らと言っつのは十中八苦、

百物語組だろう。家の組は大丈夫であろうか・・・

「まあ、一応江戸に妖怪忍者を十人ほど向かわせてくれ。後、各幹部に少し警戒をしてくれと伝えてくれ。」

「了解しました」

「大丈夫かしら・・・」

「それは、どっちだ？ 奴良組の事か？それとも氷斬組の事か？」

「・・・正直言えばどっちもかしらね」

「まあ、そりゃそうだろうな。昔はあいつの事が好きだったわけだしな」

まあ、百物語組の事は奴良組に任せておけば大丈夫だろう。

俺が恐れているのは、江戸の百物語の噂を真似する奴が出てくるとだからな。

もし、この奥州でそんな事が起きているのなら何が何でも止めなければならねえし。

「でも・・・」

「ん？どうした？」

「今は、あなたの事が好きなのよね・・・」

「・・・恥ずかしいだろ」

「ふふふ・・・」

そっついながらも、時はまた一刻一刻と過ぎていくのであった。

時が経つのは早いもの（前書き）

武士道です。

最近は更新が遅くてスイマセン。

時が経つのは早いもの

氷斬が百物語組の事を心配し始めてから百年余り……

時代は江戸から明治へ変わった頃、氷斬は何時もどおりに家族と飯を食っていた。

氷斬組は今日も安泰である。

「白雪、その醤油とって」

「はいあなた」

「お、ありがとさん」

現在、俺は白雪達と朝食をとっている所だ。

この十年色々あったけど、一番の思い出は息子達が出来た事だ。全部で三人いる。

その内、二人は白雪との子供。残りの一人は御存知の通り氷羅である。

氷羅はまずいいとして、問題は家の馬鹿息子二人である。

二人とも人間の名前をつけているが、いずれはこの二人の内の一人を二代目氷斬とするつもりだ。

能力も二人とも申し分はない……が、白雪に似たのか少しやんちゃな弟と俺に似た大人の雰囲気を漂わす兄がいた。

一人は氷渡ひわた 禅ぜん 氷斬の長兄、冷静沈着で頭がいい。ぶっちゃけ、俺は禅を氷斬にしたいのだが、禅はやる気が無いのだ。

この前なんか、『親父、俺は教師になるんだ。組の長に何かなる気は無いからな!!』と自信満々に言われた時は相当落ち込んだ。

さて……問題は弟のほうだ。

名は、氷渡ひわた 爽そう 名前は爽やかに見えるだろうが、騙されてはいけ
ない。

こいつは一番厄介なのだ、能力はいい物を持っているのだが上手く
扱うことが出来ない。

それに性格としても、少し考えずに突っ込む所が多すぎる。

これは、組の管轄にはとても重要な事だ。

俺の名を受け継ぐ気は禅以上なのだが・・・（ぶっちゃけ、禅にも
見習ってもらいたい）

まあいい、これから教えていくとしよう。

「親父、俺にも醤油を貸してくれ」

「ほらよ」

「サンキュ」

「・・・」

「ん？どうした親父」

どうして禅はこうなんだろう・・・組を継がないとは聞いたが、俺
の目の前で外国語勉強するってどういうことだ？
それにこいつは・・・

「父ちゃん！！ 後で俺の修行に付き合ってくれよ！！」

「あ、ああ。いいぞ」

「やったあ！！」

「ふふふ・・・よかったわね、爽」

「うん！！」

まあ・・・いいんじゃないかな。こんな家族も・・・

「お父様！！」

「お、氷羅か？ どうした？」

「兄上が私の鑑をとったのです！！」

半泣きしながら、俺にしがみついて来る氷羅。

馬鹿な息子二人のせいもあってか、余計に可愛く見えた。

「はいはい、こら爽。いい加減返してやれ」

「うう・・・父ちゃんがそういうなら」

「ほら氷羅」

「ありがとう！お父様！」

「どういたしまして」

氷羅はとことこと歩いて、雪羅の元へと向かったようだ。

飯が食い終わると、各自日頃の活動をする。

禅は勉強や読書、たまに修行。爽はひたすら修行。

雪羅や白雪は五人位の人間の子供達や氷羅の世話。

俺は組の運営と、それから墓参り。

俺は妖怪、たとえ百年が過ぎようとも死なない。

しかし、俺が戦国の時代に拾ってきた子供達は皆死んだ。

死に方は様々、戦争で死んだ奴もいれば、病気で死んだ奴もいた。

酷い奴だと妖怪にやられたり、盗賊に襲われて死んだ。

子供達と言えば、あの時の少女銀紗はと言うと江戸時代になると、

上京し一人で暮らし始めた。

江戸ではずっと薬屋を営んでいたそうだが、しかしある日病で死んでしまった。

俺が会いにいった時には既に死んでいた。

あの時、『私、義父さんの為に頑張るね！』といったあの子が死ん

だ。

子供達の遺体は皆、故郷である。この出羽の山に葬られている。
俺は毎日、仕事が終わった後拝みに行くのだ。

「皆・・・俺に子供が生まれたぞ。馬鹿な子供達だがやれば出来る
子供達だ。」

これから、あいつらの事も見守ってやってくれよ?」

俺はそう言いながら、手を合わせ拝んだ。

そして・・・時はぬらりひよんの孫の時代まで進んでいく

時が経つのは早いもの（後書き）

二代目の事が書けなくてスイマセン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4158v/>

ぬらりひよんの孫の世界に転生？えっ？ということ？

2011年12月13日23時52分発行